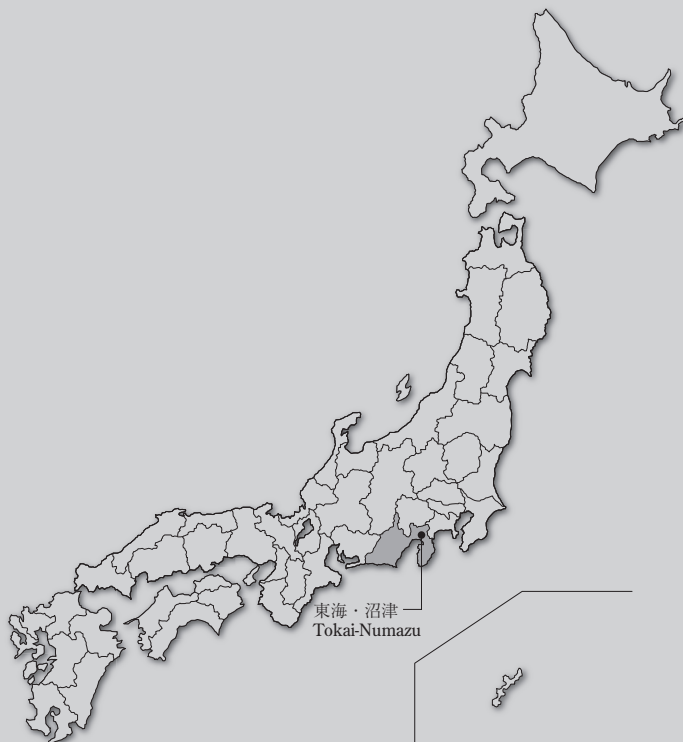


東海・沼津の民具

Mingu of Tokai District-Numazu

神野善治



凡 例

- 1) この表は、国内研究協力者の佐藤裕子氏（元沼津市歴史民俗資料館）が2011年2月の研究会のために作成した表に、『沼津市史 資料編 民俗付録 民具図集』（沼津市2002年）、『漁具の記憶 奥駿河湾の漁法と漁具』（沼津市歴史民俗資料館2006年）、『生活用具とものづくり』（沼津市歴史民俗資料館2007年）の要素を加え、神野善治が加筆修正したものである。
- 2) 本表の分類（掲載順）は『沼津市史 資料編 民俗付録 民具図集』の分類（掲載順）に準じている。ただし、稲作用具、畑作用具、ミカン栽培用具、製茶用具までを「農耕用具」で括り、諸職用具と計量・計算用具は省いた（下記目次参照）。
- 3) 「名称」欄の民具名は、『国際常民文化研究叢書6 一民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]』（神奈川大学 国際常民文化研究機構2014）に記載の名称に揃うよう心がけたが、[民具名一覧編]に記載のなかったものについては便宜上つけた名称である。
- 4) 「沼津の主な呼称」欄は、「沼津での呼称」に記載したもののうち、代表的なものを選んだ。
- 5) 「画像ファイル名」欄に記載のあるものは、本叢書144ページ以降の画像一覧にまとめて掲載した。なお、画像はすべて上記資料からの転載である。快くご許可いただいたことに改めて御礼申し上げたい。
- 6) 「画像ファイル名」について

画像ファイル名は、出典をたどれるように名づけた。出典は3種あり、それぞれ以下の構成となっている。

例) 沼1_図006_スキ

→「沼1」は『沼津市史 資料編 民俗付録 民具図集』、図6の「スキ」（当該地の呼称）であることを表す。

※作画／神野善治 外立ますみ 千賀葉子 山田景子 土屋とし枝

例) 沼2_p011_シビカギ

→「沼2」は『漁具の記憶 奥駿河湾の漁法と漁具』、p11記載の「シビカギ」（当該地の呼称）であることを表す。

例) 沼3_p08_煎鍋

→「沼3」は『生活用具とものづくり』、p8記載の「煎鍋」（当該地の呼称）であることを表す。

目 次

農耕用具	p. 123	衣の用具	p. 138
養蚕用具	p. 127	食の用具	p. 139
山樵用具	p. 128	住の用具	p. 142
漁撈用具	p. 129		
運搬用具	p. 137	画像一覧	p. 144

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
農耕用具				
稲作用具 耕起・整地				
三本鍬	マンノウ	マンガ、マンノウ、サンボンマンノウ	田起こしに最初に用いる3本刃の鍬である。乾田や浅い田では大きく振り下ろし、稲株を切りながら荒く掘り起こしていくため、この作業をアラオコシという。	沼1_図001_マンガ、マンノウ、サンボンマンノウ
五本鍬	コデギリマンノウ	コデギリマンノウ、コデギリマンガ	アラオコシの後のナカギリやコデギリに用いる5本刃の先の尖った鍬で、アラオコシで一度に3条ずつ起こして畝を積んだ田に水を張り、鍬で土塊を押し引きして砕きならず。また堆肥の切り替えしにも使われた。	沼1_図002_コデギリマンノウ、コデギリマンガ
窓鍬	オコシマンノウ	オコシマンノウ、アラオコシ	浮島沼周辺の泥炭土壌の深田で用いられる窓鍬である。底なしの泥沼で、アラー草を刈り倒し、その上に土をかぶせていく地盤作りに使われた。この田起こしのことをアラオコシという。ジョレンの使用にも似て、土をすくう作業でもあるため、このような平たくやや広がった形の鍬を用いる。柄が長い。	沼1_図003_オコシマンノウ、アラオコシ
泥払い	クワハラ	クワハラ、クワハライ、クワヘラ、クワベラ、アロトリ	これは田畑を耕作する際に鍬につく固まった土を掻き落す竹籠である。大きさは5寸から8寸くらい、幅7分位の先の尖った竹籠で、又まれには鉄籠を使用するところもある。	
田下駄	アラーゲタ	アラーゲタ、アゼクリ	浮島沼周辺のアラーオコシには、そのままでは足が沈んでしまうので、このような杉板に鼻緒のついた田下駄やナンバを履いて作業した。	沼1_図004_アラーゲタ、アゼボクリ
株切り鍬	カブキリ	カブキリ、カブキリグワ	二毛作を行う乾田で、稲刈り後、麦畑へ転換するための田起こしにとりかかる。その際、まず稲株の根をひと株ずつ起こすことから始める。	沼1_図005_カブキリ、カブキリグワ
犁	スキ	スキ	土壌が堅い乾田での田起こしに牛馬に曳かせて使用した。	沼1_図006_スキ
畦切り鎌	アゼキリガマ	アゼキリガマ	畦切りや土手草を刈るのに用いる中薄刃の鎌で、柄の長さは肘から手先までより長い。畦作りは、まず畦の端を鎌で一直線に切り、ヒラグワで土をヒトクワずつあげ、それを足で踏み固め鍬の底面で泥を塗り固める。	沼1_図007_アゼキリガマ
苗代鍬	ナゼイタ	ナゼイタ、ヘロクリ	苗場（水苗代）に親を蒔いたあと、このヘラ状の板でなでるようにごく薄く泥をかけ、軽く押さえると、親が自然にシロ（苗代）の中へ入っていく。コテ塗りをするような動作から、整地用具と同名のヘロクリともいう。杉などの軽い素材で製作する。本来は一枚板製であったが、次第に使いやすい滑らかな形や角度の工夫がされた。	沼1_図008_ナゼイタ、ヘロクリ 沼1_図009_ナゼイタ、ヘロクリ 沼1_図010_ナゼイタ、ヘロクリ
馬鍬	マンガ	マンガ、マンガア、シロカキマンガ	田植前の代掻き、代づくり用。畦塗りを済ませた田に水を張り、牛馬に曳かせ土の塊を細かく砕く。浅い田（乾田）、持ち田の多い家で用いられ、深田では使用しない。	沼1_図011_マンガ、マンガア、シロカキマンガ
柄振	エブリ	ヘロクリ、エブリ	代づくり用の大型のならし具。オオアシで踏んだ田の表面を平らに均す。また脱穀後、穀類の天日干しに、天地返しにも用いる。「静岡県方言誌」には、エポリ、シロカキ、シロナラシ、ナラシグワ、ノロマ、ヘリクリなどの呼称も記載。地の堅い海岸部では、針金の歯を付けたり、針金をコイル状にしたものを使う傾向あり。	沼1_図012_ヘロクリ、エブリ
		トンボ、ナラシ、エブリ	1本の檜の柄先を2つに裂き、板を取り付けたもので、シロの整地用。二股の柄をつける、ブレがなく安定する。	沼1_図013_トンボ、ナラシ、エブリ
灌漑				
踏車	フミグルマ	フミグルマ、ミズグルマ	代づくり前や田植の際、用水路から田に水を引き込む揚水車。水はけの良い高低差のある田を持つ地域で使用された。海拔の低い地域では田へ水を引き込むほか、逆に冠水した田の排水にも使った。水路脇に杭を打ち、水車を固定し、上に1人が乗り、足で踏んで羽車を回して用水路より高い田へ汲み上げた。	沼1_図014_フミグルマ、ミズグルマ
田植				
大足	オオアシ	オオアシ	苗場や田植前のシロの整地に用いる。シロツクリのときに、山から採取してきた柔らかい木の枝や刈草、麦稗などを肥料として敷き込み、水が膝丈までである状態で裸足にオオアシを履き、両手に縄を持ち、草を交互に踏み込みながら歩きまわり、田の表面をならした。これをシロ踏みという。深田になるほど大型で多量のものが用いられ、沈まないような工夫がされている。 ※参考→「浮島沼周辺の生活用具」『沼津市歴史民俗資料館紀要』3	沼1_図016_オオアシ
担ぎ棒、天秤棒	カツンボウ	カツンボウ、テンピンボウ	田植の際、バイスケやナエカゴに苗を入れ、この棒の両端の突起に掛けて、前後に振り分けて担ぐ。水桶・肥桶・カツギダワラなども担ぐ。これを1荷という。この天秤棒の命はシナリ（弾力）の具合だ。うまくシナリと軽く、シナらないと直接肩にくい込み重くなる。主に弾力のある檜材を用いる。	沼1_図017_カツンボウ、テンピンボウ
苗籠	バイスケ	バイスケ、バイスケ、ビヤースケ	篠竹やトツルで編んだ浅い籠で、水切りが良いことから、苗や堆肥、土の運搬に用いた。通常はカツンボウに振り分けにして担いだが、重いものの場合には1つを丸太の中央に提げ、サシ（2人）で担いだ。	沼1_図018_バイスケ、ビヤースケ
田舟	タブネ	フネ、タブネ、ヒヤープネ	通年水のひかない深田で、田植や稲刈の際、苗や刈束の運搬に用いた。ヘサキとトモの両側に綱を付け、畦の両側から曳き合い、田の中ほどまで進めたり戻したりして苗を送り、刈り取った稲が濡れないように畦に出した。田に客土するときに土を入れて用いたり、田植前にフネの中に土を入れて重くして、田をならすのにも使用した。	沼1_図019_フネ、タブネ、ヒヤープネ

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
田植縄	ナワハリ	ナワハリ、ナワバリ(田植縄)	田植の際に、苗を植える基準に張るシュロ縄。三角ワクが使われるようになってから基準線を決めるのに使用した。等間隔に布や玉などで印をつけたものは、それに合わせて直接植えた。のちに竹竿の節を目安に植える竿植えという方法も行われた。	沼1_図020_ナワハリ、ナワバリ
		ナワハリ、ナワバリ(二条植え)	苗を植える能率をあげるために1本糸でのナワハリから工夫されたもので、縄を一度に2本張り、2条植えをする。小規模な田で2人で植える時や、手伝いを大勢頼むときなどに用いる。田の両端に刺し、自分の植え幅で2本の縄を往復して植える。	沼1_図021_ナワハリ、ナワバリ
田植枠	ワク	ワク	三本柱形の田植定規である。1人1つを持ち、3本の横材にそれぞれ植える間隔(7寸)を示す印をつけ、この印を基準に苗を植える。定規による正条植えが、コロガシの普及につながり、除草の労力が軽減された。	沼1_図022_ワク
筋引き	スジヒキ	センビキ、スジヒキ	乾田での田植で、田面に筋を付け、植える間隔をとる。田の中央に1本の縄を張り、それを基準に縦横に筋を引く。ナワバリやワクの場合は後退して使うので自分の足跡をならしながら植えなければならないが、これは土をならすことなく前進して楽に植えられるのと、自分のペースで植えることができる利点がある。	沼1_図023_センビキ、スジヒキ
管理				
回転除草機	コロカシ	コロカシ、コロバシ	除草に用いる。ハンドルを持ち、やや手前を浮かせるようにし、押し引きしながら前進すると、二輪車の前輪で土とともに雑草を起し、後輪で雑草を土中に押さえ込む。	沼1_図024_コロカシ、コロバシ
案山子	カカシ	カカシ、カカシサン、カカシンボ、ニンギョーカカシ	収穫前の穀実に害を及ぼす鳥獣を排除するための威嚇具。	
威し	カラス	カラス	杉板を鳥形に切り抜いたスズメオドシで、穂が稔るころに田に吊るした。養蚕を営んだ家では、蚕の飼育に使うリュウキュウと呼ばれるい草製の網を吊ることもあった。	沼1_図026_カラス
	オドカシ	オドカシ、オドシ、オゾカシ	田畑の周囲に棒を立てて綱を張りまわし、その棒の先端や綱の周囲に布羽紙などひらひらするものを多数吊り下げて置くものである。そのほか鳥の死骸や鎌や籠などを棒の先に吊るしている事もある。	
鳴子	ナリコ	オドカシ、ガンガラ、ナラコ、ナリコ、フエノカカシ	音響によって農作物に対する鳥獣害を防止・軽減する道具。	
蚊火	ヒナワ	ヒナワ	山野で働く際、蚊・ブヨなどの吸血小昆虫を追うため腰にさげた苞形の道具。火をつけて煙を出した。	
		イブシ、エブシ、エブシモノ、ヒナワ	田畑の害虫等を追い払うために火をつけて田畑の隅などに焼して置くものである。	
肥桶	ツケオケ	ツケオケ	下肥を運ぶ容器。木製の桶で、背に背負って運搬する。	
肥俵	ゲスタワラ	コエダワラ、ゲスタワラ、タワラ、ツケダラ、ナガダラ、ハイダワラ	肥料運搬具。米俵と同様の藁製の縦俵で、円又は四角形の藁製の蓋をして口縁につけた4本の縄紐で十文字に結ぶ。米俵より少し短く直径はほぼ同じ。人が背負ったり馬につけて運ぶ。	
収穫				
草刈鎌	クサカリガマ	クサカリガマ	稲・麦や草刈り用のウスガマ。刃の湾曲と傾斜を利用して、力を入れずに刃先から滑らせるように切る。柄を尖らせてあるのは、刈り束をスギヤーナ(すがえ縄)で結わえる際に、腰に差して作業をするためである。	沼1_図027_クサカリガマ
鋸鎌	ノコギリガマ	イネカリガマ、ノコギリガマ	鋸目のついた短柄の稲刈鎌。現在でも田の四隅の手刈りに用いられる。鋸鎌以前はウスガマを用いた。ウスガマは回すように引いて切るのに対し、ノコギリガマはまっすぐに引くという違いがあり、頻繁に刃を研ぐ必要がなく、容易に扱える。	沼1_図028_イネカリガマ、ノコギリガマ
田下駄	ナンバ	ナンバ	稲刈りや田起こしのとき、軟弱で歩きにくいドブツで裸足にこれを履いた。ナンバは自家で製作することが多い。深田では沈まぬように、切株の上をつま先で歩くようにした。かかとをおさえる杵付。	沼1_図029_ナンバ
	アーラゲタ	アーラゲタ、アゼボクリ	普通の下駄状の田下駄。鼻緒が付くが、歯はない。泥湿地の歩行や湿田の作業などに着用される。	
刺棒	トンガリボウ	ツキオトシ、カツンボウ、トンガリボウ	稲束や麦束を担う両側の尖った棒。ヒト尋、約5尺の縄で結わえた一把を「大束」というが、これを突き通して男衆が担いで脇の道まで出す。片方に突き刺した後、反対側に刺す際に持ち上げることで、既に刺した束がずり落ちないよう、片側にシュロ縄や竹タガ、ゴムなどを巻いて滑り止めにした。	沼1_図031_ツキオトシ、カツンボウ、トンガリボウ
稲架	ウシ	イネカケ、ウシ、ハス	刈りあげた稲を掛けて、乾燥させる。2本の棒を交差させて立て、竹竿や細長い棒を渡す。	
脱穀調整				
千歯扱	イネコキマンガ	マンガ、センバゴキ、イネコキマンガ	稲麦の粒を穂から抜き落とす脱穀具で、足踏み脱穀機が普及する大正期まで用いられた。横材に足を掛けて押さえ、穂束を歯にひっかけて粒を抜き落とす。これを用いると糠に傷がつきにくいので、種穂を取ることにかぎって、足踏み脱穀機の普及後もこれを使った人もある。	沼1_図032_マンガ、センバゴキ
足踏み脱穀機	アシブミ	イネコキキキヤア、アシブミ	ペダルを踏むとクランク式でドラムが回転し、ドラムの突起に稲や麦束を掛けて穂を落とす脱穀具。この機械には糠が飛散ないようにバリ(杵)を取り付け、その上に筵をかぶせて回転ドラムを覆った。	沼1_図033_イネコキキキヤア、アシブミ

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
担俵	ヒヤアダアラ	カツギダワラ、ヒヤアダアラ、ハイダワラ	タワラアミで編んだコモの底を縫いとじた藁の容器。1 荷を天秤棒で運んだり、1 つを肩越しに担いだりする。脱穀後に籾を屋敷まで運んだり、サツマイモの貯蔵にサツマガラまで運んだりした。籾用には通常の 2 倍の深さのものを用いた。堆肥も入れるのでヒヤアダラ（灰俵）ともいう。	沼1_図034_カツギダワラ、ヒヤアダアラ、ハイダワラ
筵	ミシロ	ミシロ	穀物の天日乾燥や、脱穀具やトウミを使う際に敷いたり、覆いとして被せたりと、農作業に多岐にわたって用いられるため、農家では何十枚も用意した。物がなかった時代には、使用済みのカマスをほどいて使ったり、ミシロを 2 つに折り、両ミミを縫いとじるとカマスにもなった。	沼1_図035_ミシロ
柄振	ヘロクリ	ヘロクリ、ナラシ	板材に凹凸の浅い刻みを付けた掻き具で、籾などの穀類を筵に広げ、これで返してまんべんなく天日に当てる。筵に広げた籾を掻くと溝ができて、日に当たる表面積を多くとれる。シロカキあとの田の整地にも兼用された。	沼1_図036_ヘロクリ、ナラシ
箕	フジミ	ミ、フジミ	篠竹とフジで編まれたしなりの良い箕で、脱穀後の米の風選に用いたり、穀物を入れて運んだりした。堆肥を田畑へ撒く際には前後逆持ち、小脇にかかえて撒いた。	沼1_図037_ミ、フジミ
扇風機	センプーキ	センプーキ、カザグルマ	箕で穀物の選別をする際に用いる手回しの風車である。脱穀した籾を箕にいれ、脇でもう 1 人がセンプーキを回して風を送り、肩に担いだ箕から籾を徐々に落とすと、軽いゴミやシナス（しいな）が飛び、実が下に落ちる。粗いゴミをこれで飛ばしておき、トウミで選別した。	沼1_図038_センプーキ、カザグルマ
篩	アラドオシ	アラドオシ、モミドオシ	脱穀後に、ゴミと籾とを選別するのに用いる目の粗い曲物のトオシ（篩）。これをやや傾けて振ると重い籾が下に落ち、かさばるシクヤゴミが残る。	沼1_図039_アラドオシ、モミドオシ
通し	トオシ	トオシ、コゴメドオシ	檜の曲物に桜の樹皮でとめた、金網のトオシで、カラウスで籾の殻をむいた後の玄米と籾殻とを選別する。大量の選別には千石トオシを使い、少量の場合はこれで済ますことも多かった。	沼1_図040_トオシ、コゴメドオシ
唐箕	トウミ	トウミ	脱穀した米・麦・ソバなど穀物の選別用。ハンドルを回し内部の風車で風を起こしながら、穀物をジョウゴから入れると、ジョウゴ下の一番口から実の入った粒が落ち、二番口からは実の入らなかったシナスが落ちる。さらに三番口からは軽いゴミが吹き出す。二番口から出たものは、再度トウミにかけた。	沼1_図042_トウミ
木摺臼	カラウス	カラウス	籾摺用。T 字型の柄を押し引きして上臼を回転させ、下臼と摺り合わせて籾殻をむき、玄米にする。殻と玄米が混じって出るのでミゴボウキ（藁箒）などではき集め、トオシやトウミで選別する。古形の臼は全体が木製で、合せ面に放射状の刻み目が入る。	沼1_図043_カラウス（木摺臼）
土摺臼			籾摺用の臼。籾の殻をむき、玄米にする。T 字型の柄を押し引きして回転させる。これは改良型で、上臼は木製だが、下臼は竹で編んだ棒に土を入れ、カン製の歯木が埋め込まれている。	沼1_図044_カラウス（唐臼）
漏斗	ジョウゴ	ジョウゴ	俵やカマスに穀類を入れる際に使用するブリキ製のジョウゴ。ブリキ以前は竹で編んだものであった。	沼1_図045_ジョウゴ
棧俵	サンダワラ	サンダワラ、サンダラ	俵の蓋。俵は、コモを筒状にして両側をこれで蓋をして、縫いとじたもの。ミカン出荷用のカゴの蓋にも大きめのサンダワラを蓋にした。また、抱猪神の団子を運ぶ器としても用いた。	沼1_図046_サンダワラ
手鈎	テカギ	テカギ	穀類を詰めた俵を担ぎ上げる際に、重量があるため、この短いテカギで引っ掛けて上げた。	沼1_図047_テカギ
俵刺し	サシ	サシ	マダケをはずり切りにしたもので、片側には節がついている。供出米の検査をする際に、これを俵に差し入れ、微量の米を抜き出した。	沼1_図048_サシ
穀櫃	コクビツ	コクビツ、カンカラ	ブリキ製の缶に蓋が付く穀物用の容器である。一時的に籾や玄米などを保管しておくのに用いられる。	沼1_図049_コクビツ、カンカラ
挽臼	ウス	ウス、イシウス	小麦や米、トウモロコシなどの穀類を粉に挽く石臼。挽いた粉でダンゴやマンジュウ、ナベヤキなどを作った。	沼1_図050_ウス
藁細工				
藁すぐり	ワラスグリ	マンガ、スグリダイ、ワラスグリ	刈ったままの稲には、ハカマが付いてささくれだっているもので、それを取り除く用具である。藁束の元を持ち、歯に引っ掛けてハカマを除く。歯にはセンバゴキの歯を転用したり、樫・檜・竹などの堅い材で自作した。	沼1_図051_マンガ、スグリダイ、ワラスグリ
槌	ツチ	テツチ、ツチ	藁叩き用の槌である。藁細工の下仕事として、すぐった藁を少し干し、細工しやすいようにこれで叩いて柔らかくする。かつて農家の母屋には、たいてい土間に平たい石が据えられており、それを台にしてテツチで藁をたたき、しなやかにしてから使った。重量のある堅い木を使用し、1 本から削り出している。	沼1_図052_テツチ、ツチ
俵編み台	タワラアミダイ	タワラアミダイ、オモシ	俵やコモ、カツギダワラなどを編む台と重り。台は栗の股木を二つ割りにした脚に、横棧を通したもので。横棧の上に藁を置いては縄を互い違いに交差させて順次編んでいく。俵は供出する際の規定が厳しかったので、藁の長さをはかりながら編んだ。	沼1_図053_タワラアミダイ・オモシ
筵機	ミシロバタ	ミシロバタ	ミシロ（筵）を織るハタゴ。オサは重量のあるカン製。	沼1_図054_ミシロバタ
込針	ハリ	ハリ	カマスを縫い綴る専用の太い針。針の尻に細縄を挟み、カマスの袋の端を縫い綴る。	沼1_図057_カマスをとじる針
押切	オシキリ	オシキリ	藁を刻むのに、台に固定された刃に藁束をのせ、上から柄で押さえて切る。藁束の元を切り揃えたり、家畜に与える飼料や、壁土のつなぎを切ったりするのに利用される。	沼1_図058_オシキリ

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
吠	カマス	カマス	吠。藁箆を二つ折りにし、左右の両端を藁縄で縫い閉じた袋状の容器。米麦・雑穀・芋類・肥料・塩・鉱石などの包装や輸送に使用。	
畑作用具 開墾・耕起				
掘串	ヘラ	クサヌキ、タケベラ、ツムシ、ヘラ	畑や庭などの除草や豆まきなどの際に土を掘ったりするのに使用する竹又は鉄の串。大きさは5寸くらいから1尺くらいまで。	
唐鋤	トウグワ	トウグワ、トグワ	開墾などに用いられた肉厚の唐鋤。これで地中に張った木の根を切り、石や堅い地盤を掘り起こす。	沼1_図062_トウグワ、トグワ
窓鋤	メガネトウグワ	メガネトウグワ、マドグワ	窓のある開墾用の鋤。畑地専用の鋤。左右にあった窓の形からメガネトウグワの名がある。	沼1_図063_メガネトウグワ、マドグワ
備中鋤	マサオコシマンノウ	マサオコシマンノウ	大型の三本鋤。愛鷹山麓の畑地は表土に火山灰の混入した黒ボク土の軽いマサ、その下に非常に堅いヨコマサの赤土層がある。そこまで起こすと作物のできが違うため、深くうない作土する（マサオコシ）。	沼1_図065_マサオコシマンノウ
	マンノウグワ	マンノウグワ、ヨンホングワ	砂地や地の堅いところでの土起こしに用いる打鋤である。刃幅が細く床が長く、柄の角度が深い。刃と刃の間隔も狭いので、これで土寄せまでおこなう人もある。火山灰土は水気を含むと粘りが出て、鋤にかかる抵抗が多くなるので、とくに雨天のときはこれを用いる。	沼1_図066_マンノウグワ、ヨンホングワ
平鋤	ヒラグワ	ヒラグワ	畑の畝立てや土寄せに用いるサクリ用の鋤である。刃幅が細く床が長い。耕起・整地を済ませた畑での溝切りなどの作業にこの鋤を用いる。	沼1_図067_ヒラグワ
首木	クビキ	クビキ	犁やシロカキマンガ、ハッタンコロガシなどを牛に牽引させる際に、このクビキという湾曲した一本棒を首上に取り付ける。シロカキマンガやハッタンコロガシの場合は、両側に2本の綱をつけ、鞍や首木（ハモ）に接続させるが、犁の場合はまず引木という水平バランスを保つ一本棒に接続し、引木の両側につけた綱をつなげて曳かせた。	沼1_図070_クビキ
はも	ハモ	ハモ	犁やシロカキマンガ、ハッタンコロガシなどを牛馬に曳かせる時に牛馬に付ける牽引具。両脇の鉤に鎖や綱をかけて曳く。馬は肩で曳かせるため、ハモをU字形にして胸の前に取り付ける。牛用のハモは首で曳くため首の上に逆U形に取り付ける。	沼1_図072_ハモ
整地				
振馬鋤	ホオリマンガ	ホオリマンガ、フリマンガ	裏作の土作りで、アラオコシをした後、乾いた土の塊を左右に振って砕くのに用いる1人用の粉砕具。歯が1列のみなので、土に当たる部分が多くなるように前後に振りをたせている。	沼1_図073_ホオリマンガ、フリマンガ
			2人用のホウリマンガ。用途は同じだが、夫婦など2人で把手を持ち、横移動しながら左右に振って土の塊を砕く。1人用に比べ、重量があり歯数も多いので仕事の能率が上がった。	沼1_図074_ホウリマンガ、フリマンガ（二人用）
回転刃砕土機	ハッタンコロガシ	ハッタンコロガシ、ハッタン	牛馬に曳かせて転がし、土の塊を粉砕するのに用いた。これを曳くと歯が回転し、大きな塊を効率よく砕くことができた。重労働を強いられるホウリマンガでの手作業に比べ、能率という点では画期的であった。	沼1_図075_ハッタンコロガシ
鋤簾	ジョレン	ジョレン	土運びや土寄せに用いられ、道普請の際にも、窪みができた道に砂や砂利を入れるのに用いられた。	沼1_図077_ジョレン
施肥				
肥桶	ジョンベンオケ	ジョンベンオケ、コエオケ	下肥の運搬に用いる蓋付きの桶でカッソボウで1荷を担ぐ。水桶や肥桶などのこぼれやすい液体を担ぐには、吊り縄や桶に両手を添えて運ぶ。下肥用の桶には割竹を曲げた吊り具を用いることが多かった。また汚れものに触らなくても済むように、桶には持ち手の出た蓋が付く。蓋は密閉度が高く、しかも軽く叩くと簡単に外れる。	沼1_図078_ジョンベンオケ、コエオケ
麦作				
種蒔機	タネマキ	ハシユキ、タネマキ	麦のスジマキに転がして用いる種まき機で、車輪を回転させることにより、凹のある木製ロールが連動し、箱の下から等間隔に幾粒かの麦が落ちる。	沼1_図080_ハシユキ、タネマキ
種籾鎮圧機	ローラー	麦踏機（ローラー）	ムクの丸太を利用した車輪を転がして麦を踏圧する道具である。麦撒き後、正月をはさんだ土の乾く冬場、麦の分けつを促すために2回程程度の麦踏みを行う。足で踏むのが一般的だが、平坦地ではこのようなものも工夫された。	沼1_図081_麦踏機（ローラー）
麦の土入	ツチイレ	ツチイレキ、ツチイレ	麦の茎が分けつする春先に、これで麦の根元に土を振り込み倒伏を押さえる。傾斜地では軽い黒ボク土が風雨で飛ばされるため、それを押さえるために麦踏み後に土をかけたりもする。また、稲の苗場に種籾を播いた後の土かけ、海岸でのアサリ採りに使用する人もあった。	沼1_図082_ツチイレキ
草刈鎌	クサカリガマ	クサカリガマ	稲麦や草刈り用の薄刃の鎌。稲麦を刈るには、薄刃の鎌の方が早く刈れるといわれる。刃が減り切れなくなると、たいてい雑草刈り用に転用される。その場合、刃に引っ掛けるようにして刈り取る。	沼1_図083_クサカリガマ
麦打台	ムギハタキ	ムギタタキ、ハタキダイ、ムギウチダイ	木製の枠に割竹の棧が細かく入った台で、収穫後よく乾燥させた麦束を、3、4人が並びこれに打ちつけて脱穀する。麦はノゲをとる手間があり、脱穀後に何回も叩き、トオシにかけては取り除くという作業を繰り返さねばならず、一度に多量にとることができなかった。足踏脱穀機が使われるようになってからは、これで叩くとキズがつきにくいことから種をとるときのみ使われた。	沼1_図084_ムギタタキ、ハタキダイ、ムギウチダイ
木槌	オ	オ、ツブテコーシ	穀類を槌の側面で叩いて落とす木槌で、豆類やソバを叩いて殻を取るのに用いた。長い柄がつく。少量の場合は、藁叩き用のテヅチを用いることもある。	沼1_図085_オ、ツブテコーシ

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
鬼歯	タタキ	オニバ、タタキ	頭部に深い刻みのある脱穀具で、ムギウチダイではたいた麦や稗のノゲやジクなどを筵の上で叩いて落とす用具。落ちやすいようによく天日乾燥させて叩いた。	沼1_図086_オニバ、タタキ
	アオ	アオ、オ	鬼歯、稗打ちの一種。角な槌の面に凹凸を付し4尺位の柄を嵌めたもので立って打つに都合のよい様に打面が先方に傾斜している。槌が円形になっているところもある。	
叩き板	オ	オ、コテ	簡易に使う叩き道具で、脱穀後の麦や稲のジク、豆類などをミシロの上で座って叩いた。穀類の場合、叩き道具を用いた後の少量の取り残しを叩くの用にすることが多かった。軽くはたきやすいので、別の用途として、竹割りの際に、鈍のミネを軽く叩くの用に利用する人もある。	沼1_図087_オ、コテ
扱箸	マメコキ	マメコキ、コキハシ	マダケを二つ割りにして先を尖らせ、元を藁縄で結わえたもので、大豆のサヤから豆を扱き落とす。これを右手で縦に持ち、収穫した大豆を茎ごとはさみ、手前に引いて豆を扱き落とす。2本で使うことから、コキハシともいう。	沼1_図088_マメコキ、コキハシ
篩	トオシ	トオシ	側面は竹の芯にトゾルを編み込み、網目も細いトゾルを使用。これは網目の大きさをから扱き落とした大豆とゴミを選別するマメトオシと思われる。金網以前の古いもの。	沼1_図089_トオシ
担ぎ俵	カツギダワラ	ショイビク、カツギダワラ	藁製容器。吊り縄が付き一対で用いる。ビクに摘み取ったミカンをこれに集め、天秤棒で担いでヤマから下ろした。一杯分で出荷用ミカン1箱分になる。タワラアミで藁のコモを編み、底を縫いかけたもの。雨天や夜なべ仕事に自家製。藁などの穀類を入れて運ぶものと同じだが、ミカン用はやや深め。	沼1_図105_ショイビク、カツギダワラ
担ぎ籠	カツギカゴ	カツギカゴ	ショイビクの後に用いられた運搬用の竹籠。ショイビクは素材が柔らかいため、多く入ると重みで広がり、その分圧縮されてミカンがいたむことがあったため、昭和30年ころから竹製のものが普及した。ビクと同様に各家で麻袋や古着等をほどいたもので内張りをして用いた。	沼1_図106_カツギカゴ
背負子	ショイコ	ショイコ	山の畑から収穫したミカンを背負って出すのに使用する背負い梯子で、石油箱（一斗缶2本が入る）を固定して背負ったもの。図は出荷用のミカン箱を固定した例で、木の股の中央に掛けた縄を解けば簡単に箱が着脱できるように工夫されている。	沼1_図107_ショイコ
背負籠	ショイカゴ	ショイカゴ	大型の背負籠。貯めた茶葉を一旦入れ、山小屋や木陰に広げて、鮮度を保つために風通しする。この籠は何種類もサイズがあり、仕事量や背負う人の体に合わせて選んだ。肩紐をレンジャクとよび、ポッコ（ぼろ布）を草履のように編んで取り付けた。	沼1_図123_ショイカゴ
製茶				
茶鉢	オチャバサミ	オチャバサミ、フクロバサミ、カゴバサミ	静岡県で発明されたカゴ付きや袋付きの鉢。茶葉をためながら刈る。	
茶葉運搬籠	タテ	タテ、タデ	摘んだ茶葉を入れて運ぶのに使った。藁やトゾル（藤蔓）を筵状に編んでつくる俵状の縦型の容器で、口につり紐が付き、袋の底は縄を粗く編んだ網がつく。	沼1_図124_タテ、タデ
焙炉	ホイロ	ホイロ	製茶に用いられる手揉み台で、炉の部分は割竹を芯にし、シュロ縄を巻いた木舞の内外に壁土を塗り込む。起こした炭を入れ、鉄製の格子をおき、和紙を張った木枠（助炭）をのせ、その上で蒸した茶葉を揉む。	沼1_図128_ホイロ
養蚕用具				
蚕棚	タナ	タナ、カイコダナ	蚕の飼育に用いる棚で、これにヒラカゴを差して飼育をする。掃き立ての時期になると、母屋の畳をあげ、部屋中央に通路をあけて左右2列に設置する。	沼1_図129_タナ、カイコダナ
蚕座	ヒラカゴ	ヒラカゴ、カゴ、オカイコカゴ	蚕を飼う座とする。タナに差して飼育する。女竹・マダケで六つ目編みや六つ目ツツシに編み、さらに細い角材で簡易に作られるものもある。いずれも目が粗いので、上にカイコミシロや、さらに蚕座紙を敷く家もあった。	沼1_図130_ヒラカゴ、カゴ 沼1_図131_ヒラカゴ 沼1_図132_ヒラカゴ、カゴ
蚕筵	オカイコミシロ	オカイコミシロ	蚕のヒラカゴに敷く専用の筵。ミシロバタで織られるが、農作業に使う筵よりも小さく、藁も細く裂いて織られているため、薄く目も細かい。飼育の際には、この上にさらに蚕座紙を敷くこともある。	沼1_図133_オカイコミシロ
蚕網	アミ	アミ(糸網)	蚕が食べた桑の食べ滓や糞をコシリという。このコシリ替えや、座を広げるときの糸網。蚕の上ののせ桑の葉を与えると、蚕は網の上に這い上がるので、網ごと持ち上げて別の座に移す。蚕の成長に合わせて、次第に網目の大きなものを用いた。購入品。	沼1_図134_アミ(糸網)
琉球網	リュウキュウ	アミ、リュウキュウ	リュウキュウ草（琉球蘭）と藁縄で編んだ目の粗い網。5齢期の蚕のコシリ替え用。蚕も大きく成長すると重量が増し、頻繁に桑を食み糞の量も多くなるので、このようなコシのある網を用いた。琉球蘭は以前よく栽培され、これを裂いて用いた。	沼1_図135_アミ、リュウキュウ(琉球蘭網)
給桑台	クワクレダイ	ダイ、クワクレダイ	蚕に桑を与えたり、コクツ替えをしたり、座を広げるのに2台1組で使用。ヒラカゴを棚から出し、この上にのせて作業をする枠。X字に脚を開いて使用する。	沼1_図136_ダイ、クワクレダイ
蔭	モズ	モズ	上蔭時期になると蚕を1匹ずつ拾ってはモズに入れて蔭を作らせた。これはスクワラを三角折りにし、細い針金で巻いた折り畳み式で、昭和初期に用いられた。これは畳んで収納できる。蔭のケバをよく取り除いて翌年も使うことができた。	沼1_図137_モズ(島田蔭)

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
蒺織機	モズアミ	モズアミ	島田蒺を編む台。スグリ薬を2列の突起にジグザグにかけ、三角に折り曲げたものを糸や針金で巻いて作る。	沼1_図138_モズ編み
	モズオリキ	モズオリキ	モズを編む箱形の器具。2本の柄のついた棒を抜き、薬を交互に折り畳んで棒で押さえ、つづら折りにする。オリモズは縄で縛りクセをつけ、使う時に解いて三角形の空間(ヤマ)を確保しながら2束ほどをヒラゴに広げる。均一な空間にしにくいことと、ケバがとりにくく繭掻きに手間がかかる難点があった。しかし簡単に大量生産できるため、回転モズが普及するまで使用した。	沼1_図139_モズオリキ
回転蒺	カイテンモズ	カイテンモズ	厚紙製の改良モズ。これを専用の木枠に10枚ずつ掛け、上蒺した蚕を這わせて蚕室に吊るしておく。蚕は上にあがる習性があるので、上部のマス目に入って繭をかける。上部が重くなると枠が自然に回転し、蚕が入っていない軽い部分が上にくる。さらに空いたところへ蚕が入り繭をかける仕組みである。	沼1_図140_回転モズ
桑扱	クワコキ	クワコキ	クワキリガマで伐った桑の枝から葉を一度に抜く道具で、台部分を足で押さえ、交差した2本の刃部に打ち込み、枝を手前に引いて葉を抜く。蚕が成長してくると、桑を旺盛に食むようになり桑を与える作業も大変忙しくなるので、桑摘みや桑扱きにはこのような工夫された道具が出回り、労力の軽減をはかった。	沼1_図142_クワコキ
桑切挟	クワキリバサミ	クワキリバサミ	桑の枝を切る鋏。1年の飼育が終了すると来年に備えて桑の株を整えるが、その際の枝切り・株直しに用いる。また、牛を飼う家では爪切りにも利用した。図は自作の竹製ストッパー付。	沼1_図143_クワキリバサミ
山樵用具				
下刈鎌	シタカリガマ	シタカリガマ	山林の管理で、杉や檜の下枝を引き切ったり、下草を刈る柄の長い鎌。下草刈りには両手で柄を持ち、なぎ刈るように振る。	沼1_図144_シタカリガマ
草刈鎌	クサカリガマ	クサカリガマ、カマ	松葉掻き前の下草刈用の中薄の鎌。一年草やツル草などを刈り取る。柄の長さが通常の草刈鎌よりもやや長く、手先から肩ほどまでである。松葉掻きは、稲刈・脱穀を終えた12月ころから行う。	沼1_図145_クサカリガマ
熊手	コマンザリ	マンガア、クマデ、コマンザリ	松葉や落葉掻きの際、地の堅い所をかじる。掻く部分が太いと細いのがあり、ヤマ(官地)で松葉掻きをするには太いもの、海岸沿いのオハヤシ(松林)を掻くには細いものを用いる。松葉は斜面の上から下へ掻き寄せてまとめ、ミノシロタデに巻いたり、ショイカゴに詰め、堆肥に積んだり、サツマグラに入れた。	沼1_図146_マンガア、クマデ、コマンザリ
鉈	トビナタ	トビナタ	刃先に突起のある片刃のナタで、モシキやモヤ採取の際に、枯れた下枝(コサ)を突起に引っ掛けて落とし、また落ちている枝をしゃがまずに拾い上げるのに用いた。また硬いものに当てても刃が欠けない、あやまって足に当たっても怪我をしないなど、突起(トビ)が保護する役割も果たす。	沼1_図147_トビナタ
伐採・製材				
金矢	ヤ	ヤ、カナヤ	樹木の伐採で、鋸で挽く隙間(ノコミチ)を確保したり途中で木の重心を変えたりするために打ち込むくさび。伐採は、立木の根元にキリヨキという刃幅の細い斧で受け口を彫ったのち、反対側の少し上方(追い口)を鋸で挽きながら、ヤを差し込みヨキの背で叩いて締める。これで立木を安定させ、ヤを打ち込む位置で切り倒す方向を調節する。とくに傾き具合が倒す方向と反対になった場合には、大型のヤが何箇所も慎重に打ち込まれる。	沼1_図149_ヤ、カナヤ
伐採用鋸	クビツギ	クビツギ	大木伐採用の横挽鋸。首部が長く刃渡り以上の太い木が伐れる。横挽(伐採用)と縦挽(製材用)とは歯が違う。横挽は木に垂直に歯を当てて繊維を裁ち切るため、ヤスリで歯に斜めに目を立てて、一枚ずつアセリ(振り)を出す。鋸を挽くと木と鋸の間にわずかな隙間ができ、刃にかかる抵抗を少なくできる。縦挽は木の繊維に平行に刃を入れる。均一な厚みの板を得るためにアセリはあまり出さず、目立ても刃をほぼ直角に研ぐ。	沼1_図151_クビツギ
窓鋸	マドノコ	カイリヨウノコ、マドノコ	伐採用の改良鋸。等間隔に「窓」を入れた改良歯を付けるので窓鋸とも。挽き出たオガクズを、掻歯で窓の部分に溜め、刃を引ききると外に掻き出せるので、目詰まりせず伐採率が上がった。	沼1_図152_カイリヨウノコ、マドノコ
縦挽鋸	マエビキノコ	マエビキノコ、マエビキ	製材に用いられた鋸で、専門職の木挽き(伐り子)が製材所などで使用した。刃幅が広く首が短いため、刃のプレを抑えて歪むことなく材を曳くことができる。材木に墨壺の糸を張って墨打ちをし、それに合わせて縦に刃を入れる。腕の良い職人は、曲がりのある木でも曲がりなりに墨打ちをし、板材を挽くことができた。大木を挽くには、3本同時に刃を入れ、平行に挽くこともする。	沼1_図160_マエビキノコ
集材・運搬				
鳶口	トビ	トビ、トビグチ	丸太を山から搬出するときや馬力に積むときに、これを木材に引っ掛け、テコ力で転がし移動させた。これは愛鷹山の国有林など深山での出材に用いられるもので、木出しの本職が使う。	沼1_図154_トビ、トビグチ
角木回し	カクマワシ	カクマワシ	鉄釣に帯の輪がついたもので、木出しの作業で重い材を転がすのに用いる。木材に釣を引っ掛け、輪の中に棒を差し込み、テコの原理で転がした。釣の曲がりや浅く簡単に外れるため、材からはずれぬように掛けるには、コツがいった。	沼1_図155_カクマワシ
皮剥鎌	カワムキガマ	カワムキガマ	杉・檜の皮剥き用。屋根の地下材や、船の水漏れを防ぐパッキンにするマキハダ材を取る。秋口に伐採して丸剥きにする。刃先で縦に切目を入れ、そこにミネ部分の鋭利な刃を差し入れ、傷付けないよう皮を剥く。他に筋剥き(捨て剥き)用の鎌もある。	沼1_図156_カワムキガマ

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
車輪・車軸	ゴトグルマ	ゴトグルマ	急峻な山から人力で木材搬出をする際に用いる木製車輪。馬力で山へ行き、集材できる広い場所に待機させ、そこから解体したゴトグルマを背負い、カチミチ(従道)を登る。伐採場所ですこれを組み立て、木材の片側を縛り、反対側を引きずらせ集材場所まで降ろす。車の芯棒(車軸)は山で調達した。	沼1_図157_ゴトグルマ
鎖	ズリカン	ズリカン	馬力や荷車が入れない山から牛馬に牽引させて出材する用具。鎖の先についた鉄のクサビを木口に打ち込み、牛馬につないで曳きずり出した。山には専用のズリ道があった。女性がこの仕事を行う場合は、重心が低く扱いやすい牛を用いた。また人力で直接丸太をひきずっておろすこともした。	沼1_図158_ズリカン
橋	ハナゾリ	ハナゾリ	檜の丸太を二つ割りにし、コマ(横棧)で固定した小型のソリで、モシキや間伐材などの軽量なものを積み、人力で曳いた。	沼1_図159_ハナゾリ
	キンマ	キンマ、キウマ	沼津では深い奥山はないが、林業が盛んな地区で木材の伐採後、運び出しに木櫃のキンマが用いられた。キンマ道(橋道)をひらきバンギを敷いて滑りおろした。西浦や戸田では木馬曳きには古くは天竜方面などから出稼ぎがあった。 ※参考→「キンマ(木馬)」『資料館だより』7巻1	
漁撈用具				
網漁具				
漁網				
建切網	オオアミ	オオアミ	マグロ漁用の建切網。ミゴナ(稲葉の芯で編んだ縄)で5尺余りもある巨大な網目で帯状に網としたもの。湾内に入った魚群に建ち回す。大きな網目でもマグロはおびえるので効果があり、長さの割りに軽く、広い範囲をすばやく建ち廻せた。 ※参考→『あるくみるさく118 伊豆内浦～海辺の村で～』1976年、「駿河湾の漁網作り」・「駿河湾の建切網」『日本民俗文化体系13 技術と民俗上』、小学館	沼2_p009_オオアミ(部分)
地曳網	ジビキアミ	イワシジビキ、ジビキアミ	イワシ用の小型地曳網。木綿糸で編んだフクロ(袋網)、ハナヅラ(脇網)、ミゴナで編んだアラテ(垣網)からなる。網船2艘で網を立ち廻し、魚群をフクロへ落とし込んで浜へ引き揚げた。	沼2_p026_イワシ地曳網
刺網	プリサシアミ	プリサシアミ、プリアミ、ササリアミ	刺し網、刺さり網ともいう。プリなどは網目を恐れずぐり抜けようとするので網目に魚をかからせて捕る。プリ網は目が1尺2寸8分、1反の長さ10尋、高さ7尺5寸。網目はカエルマタ(蛙股)。アンバ(浮き)は漆製。数字の7の形に仕掛ける。曲り部分をオリと呼びイヤ(錘り)をつける。	沼2_p029_プリ刺網
	コザラシアミ	コザラシアミ、コザラシ	底魚対象の古式の刺網。目2寸、1反の長さ25間、高さ5尺の小型。ネ(岩礁)に掛かることが多いのでイヤがネに掛からないよう小石を藁で包んだクルミイヤをつけた。	沼2_p029_コザラシ網
	ヒラメアミ	ヒラメアミ、ヒラメサシアミ、ササリアミ	ヒラメ用刺網。1反が3つに分かれ、新しい順にカリマタ、ナカ、シリを組み合わせた。ヒラメは網の境目を抜けようとするので、この部分に掛かることが多い。網目は3寸3分、1反の長さ12間、高さ約7尺。麻糸製で目はカエルマタ(蛙股)。	沼2_p030_ヒラメ刺網 沼2_p031_ヒラメ刺網(1帖)
船曳網	テグリアミ(手繰網)	テグリアミ、テグリ	小型底曳網。2人で操業。フクロ(袋網)、イトアミ(脇網)、カケアミ(垣網)、ナワテからなる。長さ300～500尋の藁製曳網をつける。長い曳網は海底のヌタ(泥)を掻きあげ魚を脅し、網袋へ追込む効果があった。フクロは麻糸製、小魚も捕えるように網目は細かい。袋口が広がるように、袋中央にオオアンバをつけた。	沼2_p032_手繰網
	シラスアミ(しらす網)	シラスアミ、フナビキアミ	シラス用船曳網。カタクチイワシの稚魚であるシラスを対象とする。フクロ(袋網)、アワセ(脇網)、アラテ(垣網)からなり、アラテの先に約100mの網がつく。魚寄せ部分であるアラテを2艘の網船で広げて張り廻し、シラスの群をフクロへ追い込む。シラスは網目にたいへんおびえる習性を持つので、数メートルある大きな網目でも追込むのに十分効果があった。特にシラス網は1つの網の中で使われる網目の差が極端に大きい。 ※参考→『資料館だより』5巻1(沼津市歴史民俗資料館)	沼2_p034_シラス網
	カリタテアミ(狩立網)	カリタテアミ	岩礁地帯でイサキ、クロダイ、クシロ、シマアジ、タイなどの磯魚用の追込網(寄せ網・揚げ網とも)。狩立網を幾十と継ぎ合せ数百尋も立て廻し、網船で繰りかえながら網を縮小して、網袋の中に魚を追い込む。ダイタと呼ぶ脅し板が付くおとし縄を用いた。 ※参考→「追込網と琉球漁民」『資料館だより』10巻4	沼2_p035_揚げ網のカリタテアミ(狩立網)とダイタ
底曳網	エビアミ	テグリアミ、ナガトアミ、ジャコアミ、エビアミ	地先の海底を曳いて底ものの魚を捕ったり、釣漁の餌にする雑魚やエビを捕る。2つの袖網と1つの袋がつき、2本の網で曳く。袋の側の脇網は比較的目標が細かい。脇網に長短がある。	
追込網	アゲアミ	アゲアミ	イサキの追込網。揚げ網、せ網とも。イサキを主にクシロ・タイ・クロダイ・シマアジなどの磯魚を獲る。オカから片袖を伸ばし、フクラ(袋)を陸地近くに設置し、数隻の伝馬船で袋に追い込む。網は4部に分かれ、袖網をオオテ、脇網はチユウダカ・コイセアミ、魚捕部のフクラで構成される。資料はオオテ。これを何枚もつなげおよそ200mくらいにする。ダイタ(おとし板)をつけた縄を上下に動かして追い込み、最後は船に積み込んでいたマエアミを落としてフクラに追い込んで2隻の船で網を締める。 ※参考→「追込網と琉球漁民」『資料館だより』10巻4	
叉手網	ハミダモ	ハミダモ、スクイアミ	イワシなどの群れが大型魚に追われて1ヶ所に固まったところをハミと呼び、これを拘うための網。手元を船に結びつけ、竹竿2本であやつりハミをすくう。目の細かい袋状をした手編みの麻網。大きな丸い棒のタモを使うタイプのハミダモもある。	

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
漁船				
建切網船	アンブネ	アンブネ、サンガイブネ	オオアミを建ち廻すときのアンブネ（網船）。敷（底板）の両側に柵板が3段に付く特殊な構造からサンガイブネと呼ばれた。船底が細く尖って水切れがよい。不安定で外洋に向かないが、静かな入江で速力を出し、マグロの群を網で一気に入むのに有効。	沼2_p009サンガイブネ
定置網船	オオナカ	オオナカ、リョウセン	定置網の網をたぐりあげる網船。平らな船形で、船べりに漁師が並んで作業するために安定を図る。船の操作は主にカイ（櫂）を使う。大型巻揚げ機（カグラサン）が設置されている。	沼2_p024_オオナカ
魚見小屋の用具				
魚見小屋	ウオミゴヤ	オオミネ、ウオミ	地先に来る魚群を見張る小屋。建切網漁ではマグロの群を待ち、終日、海面の変化に注意を払う。小屋は磯の高台に建つ。囲炉裏があり食事用具、信号用具など特有の道具を備えた。	沼2_p013_オオミネの魚見小屋
メガフォン	ローファー	ローファー	魚見小屋で魚群を発見すると、その動きを浜で待機している漁師たちに支持するための竹製の巨大なメガホン。孟宗竹の先を細かく割り、針金の輪を入れて漏斗状に広げ、和紙（反古）を貼る。 ※参考→「ローファー（魚見のメガホン）」『資料館だより』9巻3	沼2_p015_ローファー
笠（信号用）	トンボガサ	トンボガサ、トンボガサ	魚見小屋から磯の漁師たちに魚群の動きや網の建ち廻し方を知らせるときの信号用笠。手旗信号のように振り方で指示内容が決まっていた。日除けや雨除けと同じ菅笠である。 ※参考→「トンボ笠」『資料館だより』7巻5・6	沼2_p015_トンボガサ
法螺貝	ホラ	ホラ、ホラガイ	魚見小屋から魚群を発見した時に吹いて、磯で待機する漁師たちに知らせる信号用法螺貝。貝の頂部を切り落とし吹口になっている。	沼2_p015_ほら貝
浮子・沈子				
浮子	アンバ	アンバ、アバ	漁網の浮きを一般にいう。素材は木（桐、漆など）、竹、木製の樽やガラス球、などあり、大きさは建切網や定置網用のひと抱えもあるものから、短くなった鉛筆をほどのものまである。浮子を付けるための綱や縄をアンバヅナ、アバナワなどという。	
		アンバ、コザラシアミノアンバ	コザラシ網（底刺網）の浮き木。漆製。帯状の網の上端にくくりつける。漆は海底の水圧に耐えて浮力を保つ。	沼2_p030_コザラシ網のアンバ
	テグリアミのアンバ	アンバ	漆製。同一番号を掛け合せて曳くことにより、2人が同じバランスで網を曳くことができた。	沼2_p032_アンバ
		アンバヅナ	上縁のアンバヅナは麻糸製であり、水切れがよく水中でも軽いので、網を広げやすかった。	沼2_p033_手繰網アンバ（部分）
浮子竹	タケタバ	タケタバ	定置網の浮子にする孟宗竹の束。網が沈んで魚を逃さないよう所要所に大量に取り付ける。	沼2_p023_タケタバ
ガラス球	ビンダマ	ビンダマ	ガラス球の浮き。水を吸わないのが長所だが、船上の作業時や水圧で割れる恐れがある。様々の大きさのものを定置網、延縄釣などで使用。割れにくいよう網で包んで使用する。	沼2_p025_ビンダマ
浮樽	カンタ	カンタ	揚繰網の魚捕袋を海中でひらくために付ける大型の浮き。	
	ウケダル	ウケダル、カンタ	曳き網や揚繰網の魚捕袋を海中でひらくために付ける樽でできた大型の浮き。または、延縄釣り漁などでつかう小型の樽でできた浮き。	沼2_p044_浮樽
沈子	イヤ	ヤ、イヤ、ヤイシ	漁網の錘を一般にいう。素材は石、鉛、焼き物（素焼き）などあり、大きさは建切網用の人頭大の自然石から、刺網用には小石を藁で包んだクルミイヤや、3cm程度の土錘や鉛の粒状のものまである。	
沈子（建切網用）	イヤイシ	イヤ、イヤイシ、ヤイシ	マグロ用の建切網（わら網）の下縁につけた錘石。両手で抱えるほどの大きな自然石を使った。藁縄や紐で縛るため、細長い形を選ぶ。石の中央上下を打ち抜き、縄が抜けにくくすることもある。	沼2_p020_イヤイシ 沼2_p020_イヤイシ2
沈子網（建切網用）	イヤヅナ	イヤヅナ、ヤヅナ	石を網に結びつけるための綱。	沼2_p020_イヤヅナ
土俵（定置網用）	ドヒョウ	ドヒョウ	定置網の錘にした土俵。石や砂を詰めて縄で縛り、20俵ほどを網でまとめて網が潮に流されないように固定した。	沼2_p023_定置網の土俵
沈子（刺網用）	クルミイヤ	イヤ、ヤ、クルミイヤ	よく打った藁でイヤをくるみ、仕上げに藁の尻を切るときには、短過ぎてイヤが抜けたり長過ぎてネに掛かたりしないように気をつけた。	沼2_p030_コザラシ網のクルミイヤ 沼2_p031_ヒラメ刺網のクルミイヤ
沈子（手繰網用）	ヤキイヤ	ヤキイヤ、イヤ	陶製の筒状。イヤヅナを通して、網の下端に縛る。藁製の網は水を含んで沈みやすい。	沼2_p032_ヤキイヤ 沼2_p033_手繰網ヤキイヤ
沈子（船曳網用）	イヤ	イヤ、ヤ	シラス網用の錘。	沼2_p034_イヤ
網漁の補助具				
おどし板	ダイタ	ダイタ	イサキ追込網のおどし板。白ペンキを塗る。錘石を付けた約20mの縄にこの板を30枚ほど付けて、縄を上下させ魚を追い込む。八丈島など伊豆七島で藁縄に藁ゴのオドシを付け、泳ぎながら操作していた追込網を、内浦に導入。このおどし板を工夫。 ※参考→「追込網と琉球漁民」『資料館だより』10巻4	沼2_p035_ダイタ

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
魚鈎	シビカギ	シビカギ、カギ	建切網（オオアミ）の補助具。浜に引き寄せたマグロを引き上げる手鈎。鉄製の丈夫な鈎が柄の先に付く。シビ（クロマグロ）など大型魚用。	沼2_p011_シビカギ
	ブリカギ	ブリカギ	ブリの水揚げに用いる長さ3尺の手鈎で、鈎を上向きにして魚のエラに引っ掛け船上に放り上げる。オオシビなどの大物になると心臓のあたりにカギを掛けて上を向かせ、次に「二のカギ」を掛けて引き寄せる。さらにロープをつけたメズル（柄のないカギ）で船べりまで引き上げ、カケヤで頭をなぐって締め、船上にあげる。	沼2_p029_ブリカギ 沼1_図196_ブリカギ
	メズリ	メズリ	水揚げの際に魚を引っかける全体が鉄製の鈎。軸元が輪になり縄を通せる。大型魚を滑車で吊り上げる。	
魚槌	カケヤ	カケヤ	魚叩きの木槌。波打ち際まで追い込んだマグロなどの鼻面と首の根の急所を一気に叩いて殺した。	沼2_p011_カケヤ
	ゲンコ	ゲンコ	定置網の縄を締めるのに用いる木槌。また捕れた魚を叩いて締めるのにも用いた。	
たも網	タモ	タモ	ハコアミの魚をすくい、カゴに移す。	沼2_p025_タモ
	イワシダモ	イワシダモ	イワシをすくう。	沼2_p028_イワシダモ
竹へら	イワシキリ	イワシキリ	網に刺さった魚を払い落とす孟宗竹製のへら。割竹を刀状に削る。網は毎日天日干ししたが、魚が刺さっているといたみやすい。	沼2_p028_イワシキリ
神楽棧（巻上機）	カグラサン	カグラサン	網や船を陸や船上に引き上げるための道具。網やワイヤーを人力で巻き上げた。太い角材の枠の中央に太い丸太の軸が立つ。	
魚籠	カシアゲカゴ	カシアゲカゴ	河岸揚籠。四角形をしており、イワシなどを運搬した。	沼2_p028_カシアゲカゴ
魚箱	ウケトリバコ	ウケトリバコ	木製の箱。	沼2_p028_ウケトリバコ
釣漁具				
釣竿	サオ	ヌマツザオ、サオ	沼津竿。黒鯛釣用の和竹継竿。遊魚用。「竿茂」銘。	
	ハネ	ハネ、シャビキザオ	釣竿。魚が食いついたとき鈎を素早く引き上げかかりを確実にしたり、魚の力に合わせて鈎糸の張りを調節できる。	
		サオ、ハネ	カツオ一本釣漁の釣竿。1人2〜3本ずつ用意し、釣る位置により長さを調節した。餌にはカタクチイワシの活魚を使う。撒き餌は撒き手がカツオの魚群を見て海に投げる。	沼2_p037_釣竿
	ウズワバネ	ウズワザオ、ウズワバネ、ハネ	ソーダガツオ（ウズワ）用の釣竿。	
釣糸	ミチイト	ミチイト	テジカゴや糸巻き、釣竿につけてツリを海中深くまで下ろすための糸。主にアオソと呼ばれる麻で作った。のちにナイロンテグスに変わる。先端にはテグスより細い麻糸を使ったハリスをつけて使う。	
	ピシマ	テンピシ、ピシマ	タイ釣り用のミチイト。潮に流されないよう一定間隔に粒状の鉛の錘を付いている。	
糸巻	イトマキ	イトマキ	釣糸を巻き取る。釣漁は、個人漁のコショウバイとして、沼津では、我入道・内浦・静浦などで盛んに行われた。	沼2_p036_釣糸巻1 沼2_p036_釣糸巻2 沼2_p036_釣糸巻3 沼2_p036_釣糸巻4 沼2_p038_タイ一本釣糸巻 沼2_p041_イカ釣糸巻
釣鈎（つりばり）	ツリ	ツリ	釣鈎（つりばり）。釣糸につけ餌を刺して魚などに食いつかせ、引っ掛けて釣る。イカシ（返し）の鈎がある釣鈎が多いが、カツオ用にはこれが無くナメシヅリと呼ばれる。	
	マグロツリ	マグロツリ、ツリ	マグロ立縄釣用の釣鈎。釣竿を用いず、大きな釣鈎がついた縄を海中に垂直に立つように沈めて釣る。	沼2_p042_マグロ立縄釣鈎
			マグロなどの延縄用の釣鈎。魚種により、大きさや曲がり具合が微妙に異なる。	沼2_p045_マグロ等延縄釣鈎
	ナメシヅリ	ナメシヅリ	カツオ、ウズワ一本釣の鈎は、ナメシヅリと呼ばれイカシ（返し）がない。これは釣り上げた魚を空中で鈎から振り落とす技があるため、大群の魚を効率よく釣りあげる。	沼2_p037_カツオ一本釣鈎
	テンテン	テンテン	タイ一本釣漁の釣鈎。釣糸に複数の丸い鉛の粒を錘として鑄込んで付けてある。餌にはエビを使うことが多く、大きいのは1匹、小さいのは2匹腹合わせに付ける。	沼2_p038_タイ一本釣鈎
	カケド	カケド、テーラ	イカ釣鈎。古いものは長さ10〜12cmの細い竹串の先に6〜12本の鈎を傘状に付けたもの。軸に餌を刺したり、縛り付けて使った。後に真鍮や鉄などの金属軸になって、竹製のカケドと区別してテーラとも呼ぶ。	沼2_p039_カケド 沼2_p039_カケドとホウア
	コウイカツリ	コウイカツリ、ツリ	コウイカ用釣鈎。コウイカは海底にいるので、海底で曳きずることができるよう鈎は大きく曲がっている。 ※参考→「駿河湾北部のイカ釣漁」『沼津市歴史民俗資料館紀要』8	沼2_p041_コウイカ一本釣鈎
	ネブタ	ネブタ、ツリ	アカイカー一本釣鈎。柳葉形の軸の片面は平らに、背は丸く削り、軸の先に鈎を4〜6本つける。平らな面にカツハダ（サメの一種）の身を餌として糸で縛りつけて釣った。	沼2_p042_アカイカー一本釣鈎
タコツリ	タコツリ、タコヒキ	タコ釣鈎。タコは海底にいるので、鈎が上向きになるよう、板の裏面に鉛の錘を付け、反対側の平らな面に、餌の魚・カニ・豚肉などを縛る。海底を曳きずって釣った。	沼2_p042_タコツリ	

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
天秤	ビシ	ビシ、ホーデ、ニホンホーデ	二方に出て天秤になった銅針金の中央に鉛の錘を鑄込んだもの。釣鉤のついた釣糸をそれぞれの針金の先に結び、海中に降ろす。針金のバネを利用して大きく揺らしながら獲物をおびき寄せる。	沼2_p039_ビシ (二本ホウデ)
	サッポロビシ	サッポロビシ	イカ釣用天秤。第二次大戦後に普及。錘が磁器製で、この艶のある白い色がイカを呼び寄せる。ニギリ(錘の柄の部分)があるので、ここをつかんでイカをすばやく取り外せる。 ※参考→「駿河湾北部のイカ釣漁」『沼津市歴史民俗資料館紀要』8	沼2_p040_サッポロビシ
擬餌鉤	バケ	バケ、バケバリ	餌に擬した形に作り、餌を付けずに獲物呼び寄せて捕える釣鉤をいう。なお、イカ釣りの擬餌鉤はツノという。	沼2_p038_ウズワー本釣用擬似鉤
	バショウツノ	バショウツノ	バショウイカ(アオリイカ)の曳釣用の擬餌鉤。漆の木を魚形やエビ形に削り、腹部に錘をつけ、尻に鉤をつける。	沼2_p041_バショウツノ
	イカツノ	イカツノ、サッポロツノ、サッポロ、ナマリツノ、レンケツ	イカ用の擬餌鉤。シロイカやスルメイカを釣る。鹿角を用いたのでツノの名あり。鉛を鑄込んだのはナマリツノといい、何本もの鉛製イカツノを釣糸に等間隔に連ねたレンケツ道具が大正時代に導入された。 ※参考→「駿河湾北部のイカ釣漁」『沼津市歴史民俗資料館紀要』8	沼2_p040_ナマリツノのレンケツ
	サッポロ		イカ釣り用の擬餌鉤。錘を兼ねた磁器製把手から左右(天秤)に出した銅線2本の先にサッポロツノを付けた釣糸を下げる。磁器部分はガイシ(磚子)の再利用。上部にセギビヨを利用した吊り縄が付く。	沼2_p040_サッポロツノ
餌桶	エサオケ	エサオケ	活イワシを運ぶ小型の桶。	沼2_p037_餌桶
潜航板	センコウバン	テンマ、テンマッコ、キリコミ、ブツバライ、センコウバン	メジマグロやソーダガツオの曳き釣り漁につかう。潜航板は釣鉤の仕掛けを一定の水深に保ち、左右にふれて獲物を誘う。獲物が釣鉤にかかる板がひっくり返り、潜航板が浮上する仕組み。	
錘	イヤ	ヤ、イヤ、ナマリイヤ	釣漁の道具。深みに釣鉤を素早く沈めるために用いる。	
釣縄	タテナワ	タテナワ	マグロ立縄釣りに用いる縄。	沼2_p042_立縄
延縄	ノベナワ	ヘナワ、ノベナワ、ナガナワ、タイナ、マグロナワ、カジキナワ、ブリナワ、サメナワ	マグロ、タイ、カジキ、ブリ、サメなどの延縄釣りの仕掛け。	沼2_p043_タイ延縄釣漁
縄籠	ナワカゴ	ナワカゴ	延縄漁の仕掛けを入れる平たい竹籠。幹縄が非常に長いので、幹縄のある程度の長さで切ったものをひと籠と呼び、ひと籠ごとにナワカゴ(縄籠)に入れて整理する。	沼2_p043_ナワカゴ(タイ用) 沼2_p045_ナワカゴ(マグロ用)
幹縄	ミチナ	ミチナ	延縄の釣り糸で、この縄から何本もの枝縄をつけて籠に収納する。船を走らせながら海中に投入し、水平方向に何籠分もつなげて延べる。	
枝縄	ヒヨ	ヒヨ	延縄の幹縄につく枝縄。先端にツリをつけたり、大型魚の場合はこの先にハリスがつく。	
浮縄	ウケナ	ウケナ	延縄の幹縄を一定の深さに吊り上げるためのもの。一籠分の始めと終わりにつけたり、途中にも付けたりする。船上ではウケダルや浮きに巻きつけておく。	
浮樽	ウケダル	ウケダル	延縄の幹縄が適切な深さに沈み、その位置で安定するように、幹縄の両端と途中の要所につけるウケナの上端につける木製浮き。	
浮子	フウセン	フウセン、浮き	延縄の浮きにする。空気の入ったゴム球。	沼2_p044_フウセン(ウキ) 沼2_p044_浮き1 沼2_p044_浮き2
梵天(ぼんでん)	モンゼンバタ	モンゼンバタ、モンゼザオ	竹竿に小さな旗をつけたもの。ミチナ(幹縄)の両端と結んだウケナ(浮縄)の位置につけて延縄の位置を見定める。この旗竿や浮きの沈み具合で魚が掛ったことを知る。	沼2_p045_モンゼンバタ
錘	イヤ	ヤ、イヤ、ヤイシ	延縄の幹縄が潮に流されないよう、幹縄に結びつける。または延縄全体を海底に沈めるためにつける。	
掻きへら	ササカイ	ササカイ、ササキヤー	カツオ・ソーダガツオの一本釣漁で、生餌をまいてから、これで海面を叩き、海面が激しく波立ってイワシが群れているように見える。弾力のあるマダケで作り、先端の節をスプーン状に残す。今は同様の効果を得られる散水装置が活躍する。 ※参考→「ササカイ」『資料館だより』10巻3	沼1_図191_ササカイ、ササキヤー 沼2_p037_ササカイ
縫り戻し	ヨリモドシ	ヨリモドシ	釣糸や網をひく網の途中につけ、よじれを戻す金具。○や△の環が一点で繋がれ、それぞれ自由に回転する。	沼2_p036_ヨリモドシ
環	カン	カン	仕掛けた巾着網を船上から締め上げる環網を、網の錘網と繋ぐための部品。ヨリモドシの効果がある。	
突漁具				
箱(やす)	フシ	フシ、モリ	船上から海中の魚介を突いて捕獲する。獲物のいる深さにより長い柄を何本もつないで用いる。	
	ミツギフシ	フシ、ミツギフシ	三本ドウ。フシ(モリ)の類。海中の獲物を船上から突く漁具。深いところを狙うので柄を3本つないで用いる	沼2_p047_ミツギフシ
	ツギドウ	フシ、ニホンドウ	二本ドウ。フシ(モリ)の類。海中の獲物を船上から突く漁具。深いところを狙うので柄を2本つないで用いる。	沼2_p047_ツギドウ(ニホンドウ)
	イッポンドウ	フシ、イッポンソウ、イッポンドウ	一本ドウ。フシ(モリ)の類。海中の獲物を船上から突く漁具。	沼2_p047_イッポンドウ
箱眼鏡	スイガン	スイガン	突き漁に用いるガラス眼鏡。桶状で底にガラスをはめ、船上から海中を覗く。桶屋が製作。 ※参考→「水メガネと油ツボ(海の民具6)」『資料館だより』5巻6	沼2_p047_スイガン

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
油壺	アブラツボ	アブラツボ	突き漁の補助具。竹筒に油を入れ、海面にたらし小波を消し、海中を覗いた。水眼鏡以前からの道具。 ※参考→「水メガネと油ツボ（海の民具6）」『資料館だより』5巻6	沼2_p047_アブラツボ
銚	モリ	カジキモリ、モリ、モリザオ	船上から獲物に突き捕る漁具。棒先の三本銚の先にそれぞれモリサキ（鎌）を挿し、カジキマグロなどの獲物に投げつける。モリサキにも銚にも縄（ヤナワ）がつながっており、鎌が獲物に刺さると、銚から離れ、獲物を引き寄せて船上に揚げる。 ※参考→「カジキの突ん棒漁」『資料館だより』10巻2	
離頭銚	モリサキ	モリサキ	カジキなど大型魚を狙う突ん棒の離頭銚。3本1組を1本の縄にまとめる。3本のうち1本でも刺されば捕獲可能。銚先中央にワイヤーが付けられ、獲物の体内でT字に回転して抜けなくなる。	
矢縄	ヤナワ	ヤナワ	モリサキにつなげる長い縄（ヒヨ）をヤナア（ヤナワ）という。容器をナワビツといい、モリサキをワイヤーにつけ、さらにカジキモリの銚竿の三又の金具の先につけて獲物めがけて竿を投げる。	
陥穽漁具				
釜	モジリ	モジリ、カゴ、ハズカゴ	釜をモジリとかウケという。獲物が一度入ると出られぬ仕掛け（陥穽漁具）。割竹や針金などで円筒形や円錐形に編んだ籠や釣鐘状の籠、塩化ビニールのパイプなど種類が多い。餌を入れて誘ったり、急な流れの所に仕掛ける。海で用いるものもある。 ※参考→「釜漁の研究（上）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』6、「同（下）」『同紀要』7	
	アナゴモジリ	アナゴモジリ	海でアナゴを狙う竹製の円筒形の釜。両端に漏斗状のコシタ（かえし）を付ける。中央に錘石2個。中央に魚の取出口。	沼2_p049_アナゴ・ウツボ用モジリ
	アナゴパイプ	アナゴパイプ	鉄の丸棒で円筒形の枠を作り、金網を張ったもの。片端に竹製の漏斗状のコシタが1段つき、反対側は金網と木製の蓋がつく。	沼2_p050_アナゴ用モジリ
	ハズカゴ	カゴ、ハズカゴ	塩化ビニール製のパイプの片端に竹製のコシタをつけ、反対側は金網と木製の蓋。 昭和40年代初頭頃から、波に弱い竹製のハズカゴに代わり、木枠・割竹・鉄の丸棒の骨組みに漁網や金網を張ったカゴが使われるようになった。釣鐘型と箱型の2種類がある。 ハズ（カワハギ）を主な対象とした海用のモジリ。竹製六つ目編みの低い釣鐘形で側面に魚が入る口があり、簾状の返しがつく。	沼2_p048_カゴ1（釣鐘型） 沼2_p048_カゴ2（箱型） 沼2_p048_ハズカゴ
蛸壺	タコツボ	タコツボ	孟宗竹の竹筒を利用し、片端のみが開いている。入口と取り出し口は共通。陶製のものは、第二次世界大戦後、三重より伝わった。	沼2_p050_タコツボ
			延縄釣りと同じく1本の長い縄から出た多数の枝縄にツボをつけて海底に沈め、時間をみはからって引き上げると、ツボの中にタコ（章魚）が入っているという仕掛けである。	
ふしづけ	ササモジリ	ササモジリ	竹の枝葉を束ねて錘をつけたもの。海中にしばらく沈めておくと、そこに小魚やエビなどが潜む。これを竹東ごとタモに受けてすくい捕る。狩野川河口の淡水と海水の混じる場所で行った小漁。 ※参考→「ササモジリとイカノス」『資料館だより』9巻2	
ガラス釜	コウロン	コウロン	ガラス瓶の釜。底部の中央が内側に反りかえっている。炒りヌカなどを餌に、薬束などで栓をして川床に据え、ハマなどをとる。	
ぶったい	ブツタイ	ブツタイ	割竹を簾状に編み、片方を束ねて柄をつけたもの。川口などで遡上するアユの稚魚などの小魚をすくい採る。	
海苔掻き漁具				
海苔草履	アシナカ	アシナカ	イワノリを採取するときに履く藁製の草履で、普通の草履と比べると、鼻緒を上で結んでいることと、鼻緒の位置が前に出ているため、足の指が草履からはみ出ることで磯でも滑りにくい。	
海苔簀	ノリゴモ	ノリゴモ	茅を簀に編んで、刻んだ海苔をたてる（すく）。	
海苔掻き	カイ	カイ、ヨメザラ	ブリキ板で自作した円形又は中のくぼんだ方形の板。岩海苔を掻き採る。 ※参考→「岩のり掻き具—カイについて—（海の民具4）」『資料館だより』5巻4	
笊	イソビク	イソビク、コシビク、ノリカイザル	掻き採った岩海苔を入れる小籠。	
振棒	フリボウ	フリボウ、ソダグイ	ノリヒビを立てる穴を海底にあける先の尖ったY字形の棒。収集品は浜名湖のもの。	
潜水漁具				
磯金	カキウチ	カキウチ	潜水漁師が岩礁から貝類をもぎとるために使用する金属製の道具。腰につけて潜水する程度の大きさである。	
すかり	アミブクロ	アミブクロ	貝や海藻を採って入れるための袋。藁で編んだのや麻で作ったものが多い。水のはげがよくなくてはならない。	

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
生簀				
生簀	イキョウ	イキョウ	イクスとして利用した大型の生簀籠。カツオ釣りの餌にするイワシを生かしておくのが主な用途。その他釣餌を生かしておくなどの用途があった。大きいのはカサネイキョウといい、最大で直径9尺のものまであった（これは直径5尺）。 ※参考→「イキョウー生簀籠作りの盛衰ー（海の民具3）」『資料館だより』5巻3、「伊豆の生簀籠」『民具マンスリー』12巻8号	
	ハコイクス	ハコイクス、イクス	カツオの活餌となるカタクチイワシやヒライワシを蓄養する八角枠の組み立て式生簀。これらの材を漁船に積み、漁があると枠を組み、枠に差した竹棒を垂直に降ろして網を張った。これを船にいくつも連結させ、低速で最寄りの港まで輸送した。すぐに取引しない場合は湾内で1週間～10日ほど蓄養する。	沼1_図189_ハコイクス、イクス
船上用具				
滑車	カシラセビ	カシラセビ、アタマセビ	船の帆を引き上げる（帆をまく）時に使用する滑車で、帆柱の上に取り付け、滑車に掛けた綱で帆の上げ下げをする。滑車上の穴に通した綱を、船体前方のカンスキと後部のトリイへ張って帆柱を固定した。	沼2_p052_カシラセビ（アタマセビ）
帆	ホ	ホ	風力で船を進める時に用いる和船の帆。帆の上下の端をそれぞれ竹棒に通して張る。帆布は厚手の木綿が使われ、図は4枚の布を太さの異なる3種の紐でからけてあり、布の隙間が確保されている。風を受け止めるとともに、隙間から風を逃がし、風圧がかかりすぎないように工夫されている。	沼2_p052_ホ
打ち廻し	ウチマワシ	ウチマワシ、スルリ	帆を通した竹棒（ガフ）が風で舞わないように帆柱に巻いて固定するが、帆の上げ下げには滑りやすいように短冊型の木を帯状につなげたものを用いる。筋付きの短く切ったマダケを数珠のようにつなげたものもある。	沼2_p052_ウチマワシ（スルリ） 沼2_p052_ウチマワシ（スルリ）2
帆櫃	ホビツ	ホビツ	船の帆を収納しておく楕円形の蓋付き桶。海水や降雨で帆を濡らさぬように密閉度が高い。船上に置く。また、普段は船の後方のカジの脇に置いたので、賄いで魚を切る台にすることもあって蓋にキズがある。	沼2_p052_ホビツ
碇	イカラ	イカラ	かつて用いられた木製の碇で、カシ、クヌギ、ナラなどの堅木の木の股を利用したもの、ヒノキ、ケヤキなどのミキにカシのツメを鉤形につけたものの2種類がある。中央の穴にカンスキ（丸棒）を差し、重石を縛り付けて使用した。 ※参考→「碇」『資料館だより』8巻4	沼1_図166_イカラ
錨	テツイカラ	テツイカラ、アンカー	現在も広く用いられる5トン未満の小型船舶用の碇で、鉄材を溶接したものである。イカラのツメが海底で正しく刺さるよう、シモク（カンザシ）という横棒を取り付ける。また小振りなものをダイボウ網（定置網）やチョコアミ（小型の定置網）などの土俵（重り）変わりに打つこともあった。	沼2_p054_テツイカラ
滑車	イカラセビ	イカラセビ、セビ	イカラ（碇）の上げ下ろしをする滑車。船体のミヨシ（軸）の脇に設置される。船体に収納できるようにになっており、イカラを降ろしているときや使用しない時には収納しておき、引き上げの際に出し、イカラの綱を滑車に掛けて使う。これは小型船舶で用いたものである。	沼2_p054_イカラセビ
櫓	ロ	ロ	和船を進めるための道具。櫓のイレッコ（ホゾ穴）を船のマクラに立てた櫓杭に入れ、これを支点にしてロツクとロウデを握って漕ぐ。船の規模により、一丁櫓～八丁櫓までであるが三丁櫓の場合、その配置で前櫓・脇櫓・トモロの名称がある。 ※参考→「櫓の話 その1」『資料館だより』8巻1、「櫓の話 その2」『資料館だより』8巻2	沼1_図169_ロ
入れ子	イレッコ	イレッコ	櫓に取り付ける部分品。船の櫓杭に立てた櫓づくにイレッコの穴をはめてこぐ。	沼2_p053_イレッコ部分
櫂	カイ	カイ、キヤー	船を岸につける時や定置網の操作などで前後左右に小回りを効かせるときに用いる道具。沖に係留させた船への行き来に伝馬船などで用いたりもする。	沼2_p053_カイ
梶	カジ	カジ	船尾のカンヅカ（梶束）を船尾の梶床に差し込み、カジボウを持って船の進行方向を操作する。船体に固定されていないサシカジ（差し梶）で、船を浅瀬に泊めたり浜へ曳き上げたり、漁をしたりする際には取り外す。	沼2_p052_カジ
釣瓶桶	カシオケ（ツルベ）	カシオケ	船にたまった海水をこれがかいたり、海水を汲んで魚を洗ったり甲板を洗ったりするときに用いる水桶である。この桶には網をつけ、海水を汲む際にはこの網を持って下ろす。あやまって落とすとも拾えるように、網を船体に結んでおいた丁寧な人もある。 ※参考→「カシオケとむかし話」『資料館だより』8巻3	沼1_図172_カシオケ
塗取	アカトリ	アカトリ	船に溜ったアカ（海水）を汲みだす用具。これは定置網漁の網船で用いたもので、他にもサンガイ船や伝馬船などの規模の大きな船で用いた。普段は中央のドウノマアタリに入れておいた。 ※参考→「船の掃除用具～ボウズリとアカトリ～」『資料館だより』12巻3	沼2_p055_アカトリ
すばる	カッテ（スバル）	カッテ、スバル	あやまって海中に落とした綱や道具の引き上げに使われる道具で、枝の部分を残した割竹をツト（苞）に束ね、中には石を入れてオモリとする。これに長い縄をつけて海底におろし、海底を引いて枝（釣）に引っ掛ける。獅子浜ではカッテというが、長浜ではスバルという。 ※参考→「カッテ」『資料館だより』9巻6	沼2_p056_カッテ（スバル）
苫	トバ	トバ	チガヤ、オオダガヤなどの茅で編まれた畳大のコモで、船の雨よけ、日よけとして使われるので、小船の船内に常備されていた。ミノのようにチガヤの葉先を何段にも出して編み、雨水がしみ込まない工夫がされている。これを何枚も重ね片流れの屋根状にしたり、船に積んだ網の上にかかたりしていたまぬようにした。また、スイガン（箱めがね）での突き漁で、海面の光の反射を防ぐために、トバをかけて影にした。 ※参考→「トバー漁船・漁具の雨除けー」『資料館だより』9巻5	沼2_p055_トバ（トマ）

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
船霊様	フナダミサン	フナダミサン、フナガミサン、フナダマサマ	船の守護神。大漁と海上安全を祈願して船内に祀る。船の新造の際、帆柱を支えるツツバシラに船大工が埋め込む。神体は1対の人形、柳製のサイコロ、銭12枚、五穀、女性の髪の毛（夫婦の場合も）、紅、白粉など。廃船の際は、ツツバシラをはずし、家の神棚に祀ったり、海に流したりした。 ※参考→「船霊様」『資料館解説シリーズ』10、「船霊と樹霊～船霊信仰研究の課題～」『沼津市博物館紀要10』	沼1_図177_フナダミサン、フナガミサン、フナダマサマ
船磁石	フナジシャク	フナジシャク	和船の時代に用いられた海上で方位を知るための磁石。十二支で示した木製の文字盤の「子」を北にして時計回りに目盛りを表示したものである。	沼1_図178_船磁石
羅針盤	ラシンバン	ラシンバン	船の進路をみる方位磁石で、内部には純度の高いアルコールが充填され、常に水平を保つ工夫がされている。近海漁船では、マグロなどを追って八丈島や大島などの外洋に出る船や、濃霧で陸地が見えない場合に用いる。火山地帯や製錬所など、磁力の強い場所での使用を避け、地図を見て多少の誤差を矯正する。	沼1_図179_ラシンバン
カンテラ	テールランプ	テールランプ、カンテラ	細い注口のあるじょうろのような形をしたブリキ製の照明具で、口にはぼろきれなどを詰め、灯油を燃やし船上での明かりとした。	沼2_p056_カンテラ（テールランプ）
集魚灯	カンテラ	カーバイトランプ、カンテラ	夜の漁で、主に魚を集めるための集魚灯として使う灯火。燃料のカーバイトに水を垂らし、アセチレンガスを発生させ、管の上で燃焼させて明かりを採る。大正8年（1919年）頃より、集魚用篝火（松明）よりアセチレン灯（カーバイトに水を加えたとき発生するアセチレンガスに点火すると明るい光を出す）が使用されだす。／江浦漁業組合議事録より	
	スイチュウトウ	スイチュウトウ	夜漁のときに使用した集魚灯で、水中に沈めて用いるタイプ。船上のバッテリーから電源を採る。（戦後）	
航海灯	ユセントウ（船尾灯）	センビトウ、ユセントウ	船尾灯。夜間の航行で、船の存在を知らせ進行方向を示す。夜間は左側通行となり、右に青、左に赤の色灯をつけ、後方には乳白色の船尾灯をとす。灯油を燃料とし、いずれも灯芯後方に120度を照らす反射板がつく。小型船舶には操舵室前に2色を合わせた両色灯を装備する。	沼2_p056_ユセントウ（船尾灯）
	テイハクトウ	テイハクトウ	停泊灯。港湾や海上で停泊しているときに360度いずれからも視認できる場所に点灯する。電化後も石油を使う航海灯は非常用に備えられた。	沼2_p056_白灯（停泊灯）
水樽	ミズダル	ミズダル	飲料水を入れる大型の樽で、多人数が乗り込むマカセ網漁などの漁船で用いた。運ぶ際には、ロープのついた鉄製のカギをタガにかけたり、把手に丸太を通しサシで担いだりして運ぶ。近海に出る船や定置網漁の船には簡単なカマドも設備され、船上で炊事するため、水樽はカマドとともにヘノマ（舳先の間）に置かれた。	沼1_図183_ミズダル
			小型の水樽で、水筒代わりに小漁をする船に持ち込んだ。このミズダルには注ぎ口の他に篠竹を差した吸い口がついており、ここから直接水を飲んだ。オカでの農作業にも同様のものが用いられ、山や畑に携行した。	
			遠洋での漁へ行く時に使用した、船上での飲料水を入れる水樽。	沼2_p057_ミズダル 沼2_p057_ミズダル2
弁当桶	チゲ	チゲ、メンバ、ウミハンダイ	おひつを小型にしたような弁当桶。中に2食分のメシを入れ、チゲブクロに入れて乗船した。杉が水蒸気をほどよく吸収するため、乾燥せず腐りにくかった。大漁になった場合などに備え、ご飯は多めに詰めるものだという。	沼1_図185_チゲ、メンバ、ウミハンダイ
		チゲ、メンバ	飯櫃を小型にした蓋つきの杉製の弁当桶。3～5合の飯が入り、杉が水蒸気をほどよく吸収するため、乾燥せず腐りにくい。主に静浦ではチゲ、内浦ではメンバという。	沼2_p057_チゲ（メンバ） 沼2_p057_チゲ袋入りのチゲ（弁当桶）
編袋	チゲブクロ	チゲブクロ	弁当桶を入れる袋。	沼1_図185_チゲブクロ
弁当入れ	ツト	ツト	飯を包む弁当入れ。い草で編んだ小さな萆蓆に、飯を巻いて両側を締め漁りに携行する。田畑などへも持っていった。	沼2_p057_ツト（弁当入れ）
魚桶	ヨーバチ	ヨーバチ	楕円形の蓋付桶。魚を入れる容器。船で捕れた魚をおろす時に、この蓋の裏をまな板代わりにした。アジ、サバ、シブワ、ウズワ、イワシなどを塩にするとさやかキナマスを作って入れたりした。	沼2_p058_ヨーバチ
餌桶	エサオケ	エサオケ、エサバチ	カツオの一本釣りや、ナブラ（魚群）を発見すると、急いでイワシの活餌を置き、それに喰いつく魚を釣り上げるが、その際に活イワシを入れた小型の桶である。船の生簀から釣り人のところへ運ぶのに使用した。また、延縄の釣鉤につける活餌（イワシや小イカ）も同じように運んだ	沼1_図190_エサオケ、エサバチ
釣具箱	ツリバコ	ツリバコ	仕切りのある小型の箱で、紐を掛けると持ち歩く際の持ち手となる。小漁で使う釣鉤、釣糸などの細かな道具を入れる木箱。	沼1_図192_ツリバコ
	オビツ	オビツ（箱型）	中蓋のある二段式の道具入れで、角型とおひつ型とがある。仕切りのある中蓋には釣鉤などの細かいものを入れる。小漁の船には予想外の獲物にも備え、さまざまな道具を入れておく。角型はおもに内浦地区で使われた。 ※参考「漁民の道具箱—オビツ—」『資料館だより』7巻2	沼2_p058_オビツ（箱型）
		オビツ（桶型）	桶型は楊原地区我入道で使われた。	沼2_p058_オビツ（桶型）
	マクラバコ	マクラバコ	引出し付の小型の道具箱。船上で枕にもなった。脇に引き上げ式の蓋がつく。網針や修繕用のキヨリ出刃などを入れた。	沼1_図195_マクラバコ 沼2_p058_マクラバコ
たも網	タモ	タモ	水揚げの際に海面近くまであげた網から魚をすくいあげるのに用いる。これはダイボウ（定置網漁）などでメジマグロなどをすくうのに用いられたもの。製作には松の若木を使い、枝から出た2本の枝を曲げ、輪にしたものである。	沼1_図197_タモ

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
魚籠	ビク	ビク	小漁の小船などで使った口の狭い丸い籠で、小さな笊状の蓋がつく。川漁ではうなぎを捕る際にも用いる。また釜で捕ったカニなどを川に浸けておく際にも利用した。	沼1_図201_ビク
大漁旗	フライキ	フライキ	進水式や祝祭日に漁船に掲げられる祝旗で、船名やめでたい絵柄が染められている。	
操舵輪	ラット	ラット	操舵装置の操縦把。鎖で船尾の梶とつながっていて、左右に回すことで梶を動かす。巾着網漁の動力船で使用。	
発動機	チャッカー	チャカー	小型漁船用の軽油発動機。大正12年(1923)に沼津市我入道の山本源一郎氏が、全国に先駆けて考案し、チャカの名で全国に普及した。	
股木	カトリ	カトリ	Y字の股木。漁船左舷の櫓柱2本に挿し立て、櫓や竿、鋸、ハヤツキなどの道具を渡す。枝が両方に均一に出るケヤキがよい。	
修羅	シラ	シラ	船揚げ場に並べ、船を滑らせて出漁や船を揚げる時に使用する半割の丸太。上面をやや削り平らにする。	
連結具	バチンコ	バチンコ	曳船用の木製の連結具。無動力の網船やあかり船を発動機船で曳航する際、曳き縄を木製の鉤に掛ける。この鉤の先をもとの縄に縛り、この縛りを解くとバチンコと簡単に外れる仕掛け。	
釣瓶桶	カシオケ	カシオケ、ツルベ	船に海水を汲み上げる桶。船内が汚れた時に海水を汲み入れて洗い流したり、船内に溜まった海水を汲み出したりするときに使う。網を以て船上から海面にカシオケを下ろした。	沼2_p055_カシオケ(ツルベ)
水揚げ用具その他				
魚枮	ケンチマス	ケンチマス、ハカリマス、ハカリダル	水揚げ時に、イワシや小サバなど、主に煮干しや干物加工用の小魚をはかる1斗5升入りの枮。市場ではこれを単位に取引した。桶側面に水抜き穴の穴があき、魚だけの容量がはかれる。 ※参考→「ケンチマス」『資料館だより』11巻5	沼2_p028_ケンチマス
魚桶	サカサダ	サカサダ	水揚げした鮮魚用の容器。カツオ・マグロ漁やダイボウ(定置網)で捕れた魚を氷とともに詰めて輸送した。船上でも転倒せぬよう桶底が口径より広く安定した形に作り、密閉できる蓋がつく。	沼1_図199_サカサダ
水揚げ籠	カシアゲカゴ	カシアゲカゴ	水揚げ用の角籠。狩野河口に河岸があった頃に用いた。天秤棒につけ1対を担ぐ。図はサクラエビ漁で使ったもの。	沼1_図200_カシアゲカゴ
魚箱	ウケトリバコ	ウケトリバコ	水揚げ用の魚箱。イワシを船からタモですくいケンチ枮で量り、これに受け取る。7~8分目で一斗。加工屋はトロ箱で持ち帰る。	
流し	ナガシ	ナガシ	注口の付く木槽。イワシ売買で計量用のケンチ枮を載せる。枮にタモで入れた魚がこぼれると、ここを流れて樽に溜まる。	
漁具製作用具				
網針	アンバリ	アンバリ	漁網の網地をすくときや修繕に用いられる縫針。竹を平たく削り、先端近くの中央に中針を削りだす。編み糸を巻く役目もある。 ※参考→「網すき桁」『民具学会通信』4	
	サシ	サシ	網を縫い合わせるのに使用する竹針。	
棒尺	ケンザオ	ケンザオ	網を作る時の定規。5尺1間(約1500mm)で作られている。網目を測るほか、縮結をつけるのに使用する。	
網すき桁	ケタ	ケタ	網目の寸法に合わせて網すきの支えにする板片。結節から結節までの長さに合わせて、網目の寸法ごとに用意されている。 ※参考→「網すき桁」『民具学会通信』4	
紡錘	ツム	ツモ、ツム	網糸・釣糸を作る用具。小さな木の円盤を鉄の軸が貫く。上端に鉤あり。細かく裂いた麻糸をつないで、ツムの鉤にかけ、回転させて撚りかける。 ※参考→「漁村における糸撚り技術とその用具」『沼津市博物館紀要』9	
手代木	テシロ	テシロ(手代)	釣糸製作用具。ツモ(紡錘)を回すのに使用する角材。滑り止めとして、角材の四面に菱状に鋸で刻み目が入る。 ※参考→「漁村における糸撚り技術とその用具」『沼津市博物館紀要』9	
糸撚り具	インノツメ	インノツメ	釣糸・網糸製作用具。ツモを使って麻糸に撚りをくれる時に、撚りのかかった糸(片撚りの糸)を巻いておくもの。これを2本合わせる。 ※参考→「漁村における糸撚り技術とその用具」『沼津市博物館紀要』9	
	ガラ	ガラ	片撚りの糸2本を1本にまとめる作業に使用する竹筒。水平の棒に竹筒2つを隙間をあけて通し、左右の筒の両脇から中央へ片撚り糸を1本ずつ通し、中央でまとめて撚り合せる。左右の糸の端では両手でツモを回し、中央の合わさった糸の端にもツモを下げる。	
	セギマキ	クルリ、セギマキ	延縄用などの太い釣糸「セギビヨ」を作る道具。コの字型の木枠の2本の突出部分には穴がある。これに釣糸の芯になる麻糸などを通し、両手でびんと張って持ち、この道具をぐるぐる回すと糸巻の細い木綿糸が、ぎゅーと芯材に巻き付く仕掛け。 ※参考→「クルリー麻糸のワイヤー作りー(海の民具5)」『資料館だより』5巻5	
小刀	キヨリデバ	キヨリデバ	テグスや糸を切ったりさまざまな細工にも用いる小刀。	

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
網撚り具	ナカジャク	ナカジャク	大謀網用の太綱などの網撚り具。ヨイトマケなどと呼ばれる3本の木製クランクと共に使用。3本の藁の太縄を1本に撚り合わせる時、撚りが強くなるよう合わせ目に当てる。ナカジャクとは「仲人」のこと。	
	ガラマキ	ガラマキ、ヨイトマケ	太綱を撚る3本1組の木製クランク。ナカジャクと共に用いる。2尺ほどの板にあけた3つの穴に差し込み、3本の太縄の端をつけて、反対側から回転させて3本の縄を1本により合わせる。	
	スパイキ	スパイキ	カジキのハス（上顎）でつくった目打ちのような道具で、縄と縄の接続部分を撚り合わせるなどに用いる。	
釣鉤製作具	クワエ	クワエ	尻側にクサビを入れて使う釣鉤加工用の木製のパンチ。	
	チマゲ	チマゲ	細い鉄線を1寸ほどの輪状に曲げ、柄をつけたもの。釣鉤製作や調整に使う。	
鑢	ヤスリ	ヤスリ	釣鉤加工用具。釣鉤用に曲げた鋼鉄を削ったり磨いたりするのに使用する。	
擬餌鉤材料	バケノカワ	バケノカワ	擬餌鉤（バケ）の製作用素材。ネコなど各種動物の皮やカワハギなどの魚皮。	
細鋸	ツリキリノコ	ツノキリノコ	擬餌鉤素材のカジキのハス（角）を加工する細いノコギリ。	
小刀	マキリ	マキリ	網漁の時なども常に海に持って行き、網を切ったりするのに使う。海中に落としても浮くようにキリの大きな柄をつけておく。	
錐	キリ	キリ	板材などに穴をあける四つ目錐。	
運搬用具				
背負子	ショイワク	ショイコ、ショイワク ショイコ、ショイタ、ショイバシゴ、セイコ、セーコ、ヤセウマ、ヤショウマ	木製の枠に負い縄を取りつけ、この枠を背中に当てる背負い運搬具。燃し木（焚き付け）や刈り草、松葉などを結束して背で運ぶ時に用いる枠で、個人差はあるが通常60～100kgの荷を背負うという。木枠は檜を使うことが多く、縦横に背当てる縄を巻く。肩当ではショイカゴと同様、縄とボッコ（布され）などでワラジのように編んだものを持ちいた。荷が軽くてもかさばる燃し木などは丈の長いショイコにつけて運んだ。 ※参考→「伊豆の運搬習俗」『沼津市歴史民俗資料館紀要』4	沼1_図227_ショイコ 沼1_図228_ショイコ
背負籠	ショイカゴ	ショイカゴ、セーカゴ、ダルマカゴ、	籠状の背負運搬具。タケ・蔓類などで籠状に編み、負い縄をつけた。特にかさだかいものの運搬に重宝。	
		ショイカゴ	角型の細長い籠状の背負運搬具。道具や弁当などを入れて畑へでかけ収穫した野菜を持ち帰る。奥行き（幅）が狭いタイプは、背負いやすく、第二次大戦中から出回る。	沼1_図229_ショイカゴ
	ミカントリビク	ミカントリダラ、ミカントリビク	釣り紐を肩または首にかけ、桑、茶葉や果実等を採取する籠。一旦これにとり溜め、満つれば他の大籠にあける。多くは編目が粗く、直径よりも深さのほうが大きい円筒形。	
担ぎ俵	カツギダワラ	イジコ、イジコダワラ、カツギダワラ、ゲスタワラ、タワラ、ドーショー、ハイダワラ、ハイダラ、ハンダラ、ヒヤダワラ、ヒラダワラ、フミダラ、モミダワラ	藁で編んだ運搬用の俵。担ぎ縄2本付き。深さより直径のほうが大。担ぎ縄を伸ばして天秤棒の両端にかけ2個を1人で担ぐ。直接背負うことも。穀類や果実、農産物や農具、弁当衣類、古くになると肥料や土、砂利などを入れる。	沼1_図230_カツギダワラ、ヒラダワラ
パイスケ	パイスケ	パイスケ	皿状の担ぎ籠で、竹又は藤などの蔓で編む。網目は密で砂利、砂、堆肥、草や苗などを運ぶ。	
天秤棒	カツンポー	カツンポー、カツンポー	荷物を担って運ぶ時の棒。中央を肩に乗せ、両端に荷を吊り下げて運ぶ。やや扁平に丸く削る。	
尖り棒	トンガリポー	ツキトシ、ツットーシ、トンガリカツンポー、トンガリポー、	1本の棒の両端を削り尖らせてその両方の突先に草束結束などを1箇所差し込んで、棒の中央を肩に担って運ぶ。	
畚	モッコ	モッコ、ニナイモッコ	畚。テンピンニナイやサシニナイで運ぶ用具。藁・ツタ・フジソルなどで編む。その形状・名称はいろいろ。	
釣	カギ	カギ	桶や樽の運搬用の釣。タガの2か所へツメを掛け、吊縄に棒を通し2人がサシで担ぐ。水揚げした魚の桶、タクアン漬の樽、味噌桶など重量のあるものを運ぶのにも同様に用いた。	沼1_図231_カギ
荷車	ニグルマ	ニグルマ	人力で曳く二輪車。昭和30年代ころまで一般的な荷物運搬用。ブレーキがなく坂を下る時は、後方の紐で引いて抑えたり、さらに急な坂では、車軸に長い丸太を取り付け、前方の曳き木を上げ、後方を地にさげてブレーキにした。車輪が大きい荷車をダイハチ（大八車）という。車輪が大きい分、荷を楽に曳けた。	沼1_図232_ニグルマ
荷鞍	コニダ	コニダ、コニダグラ	馬に付ける荷鞍で、腹帯、胸ガイ、尾バサミ（尻ガイ）の3か所で固定する。重い荷を安定させるために馬力用の鞍よりも大型で、両側にヒジという荷を結わえるための横棒が付く。	沼1_図233_コニダ
馬力	バリキ	バリキ	傾斜地での荷の運搬に、馬に牽引させて用いた二輪車。このタイプは東原以東で使用された。これより西の傾斜の激しい地区では、車輪を小さくし重心を下げた軽いものを用い、右側のブレーキレバーを操作しながら坂を下った。一般農家では堆肥や麦・サツマなどの収穫物の運搬に利用され、刈り草を運ぶ場合は図のように荷台両側に衝立を設けた。	沼1_図234_バリキ

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
鞍	クラ	クラ、ウマノクラ、シンチュウグラ	馬力を馬に牽引させる際に用いる鞍で、腹帯、オオマワシ（胸ガイ）、尻ガケ（尻ガイ）で馬に固定し、両脇から馬力のカジボウに綱を直接掛けてつなぐ。牛車の場合も同様である。オオマワシは馬の胸にかけて鞍のずれを防ぐ帯で、消防用のホースなどを転用して製作した。	沼1_図235_ウマノクラ、シンチュウグラ
滑車	セビ	セビ	馬力に積んだ荷を荷台に固定する際に用いる滑車で、これで縄を締める。以前は荷にかけた縄の隙間にモジ棒を差し入れ、それを縄とともにねじる方法で縄を締めた。これを「モジをかく」といった。	沼1_図236_セビ
牛の草鞋	ウシノワラジ	ウシノワラジ	牛に荷を運ばせる際に、ヒヅメがいたまぬように履かせたワラジで、人の履く草鞋と同様に藁で編んだ。	沼1_図237_牛のワラジ
馬の草鞋	ウマノワラジ	ウマノワラジ	牛用の草履よりも小振りで、カナグツが普及する以前に馬のヒヅメに履かせたもの。	沼1_図238_馬のワラジ
蹄鉄	カナグツ	カナグツ	馬のヒヅメの保護用金具。専門の鍛冶屋が製作。赤く焼けた鉄をヒヅメに当てて成形し、釘を打ち込んで固定する。一般農家の馬では6ヶ月ほどで、馬力屋などの専門業で重労働を強いられる馬は、摩耗が激しく2ヶ月くらいで打ち直しをした。	沼1_図239_カナグツ
衣の用具				
盥	タライ	タライ	洗濯用のタライ。センダクイタと対で用いる。	沼1_図240_タライ
洗濯板	センダクイタ	センダクイタ	生地汚れを落とす際に、上部のくぼみ部分に固形石鹸を置き、刻み部分で生地をこする。	沼1_図241_センダクイタ
張手	ハリテ	ハリテ	着物の洗い張りや地直しをする際に、仕立てをほどいて1本の生地に戻し洗った後、生地を両端をこれでかませて挟み、吊って干す用具。	沼1_図242_ハリテ
伸子針	シンシ	シンシ、シイシ	両側に針が埋め込まれた竹ひごで、着物の洗い張りや地直しでの乾燥に、ハリテで吊った生地を両面に等間隔に刺して張り、ゆがみを整えるのに用いる。	沼1_図243_シンシ
火のし	ヒノシ	ヒノシ	炭火を入れて衣類や敷布などの皺を伸ばすのに用いられた。	沼1_図244_ヒノシ
炭火アイロン	アイロン	アイロン	ヒノシに代わり、炭火を入れて使用するアイロン。	沼1_図245_アイロン・台
行李	タケゴウリ	タケゴウリ	衣類や身のまわり品を入れる容器で、季節が変わると衣類は箆笥から出し、行李に入れて保管した。竹行李はハコネ竹やスズ竹を多く産する御殿場市周辺などの富士山東麓地域で、明治中期以降から主要な産業として製作されてきた。	沼1_図246_タケゴウリ
衣裳箱	イショウバコ	イショウバコ	竹行李に代わり衣類の収納に使用されたもの。薄板で製作され、橙色の紙で化粧貼りをした衣裳箱。	沼1_図247_衣裳箱
掻巻	ヨギ	ヨギ	衿と袖のある古い形の夜具布団で、衿があることで肩が暖かい。比較的くらし向きのよい家で用いられた。	沼1_図248_ヨギ
綿繰り器	ワタクリキ	ワタクリキ、ワタクリ	布団や半纏などに入れる綿は、真綿とともに冬場になくなくてはならない防寒素材であったので、自家用に畑に栽培された。棉花を収穫すると、綿繰機に通し、綿の中の種をはずす。布団を仕立てるには、綿を薄い真綿でくるむ。	沼1_図249_ワタクリキ
手拭い	テノゴイ	テノゴイ	手拭。洗面・手水・入浴などに、顔・手・身体をぬぐうに布。	
仕事着	ノラジバン	タウエボッコ、ノラジュバン、ジバン	田植のときに女性が着用した木綿緋の短衣。図は浮島沼周辺の深田のもの。昭和期になりズロース型のパンツをはくようになって、このような腰までの短い丈になった。それ以前は長着や膝丈のジバンを腰を覆う程度のハショリにし、下は膝丈の腰巻か、あるいは腰巻もつけない場合もあった。	沼1_図250_タウエボッコ、ノラジュバン、ジバン
腰巻	オコシ	オコシ、コシマキ	田植のときに着用した腰巻で、足さばきのよいように、前の重なりが少なめである。モンベが普及する以前、山付きの地区では腰丈のジバン（短衣）に腰巻をして農作業をした。冬場には、裏地のついた衾の腰巻をつけた。	沼1_図251_オコシ、コシマキ
股引	モモシキ	モモシキ、モモヒキ	男性のはく股の割れたノラギで、紺無地で足にびったりするように仕立てられるので、足さばきがよい。図は明治生まれの男性が昭和20年代後半まで着用したもの。ノラ仕事以外でも、タビに出る（村外に出る）時などには、長着をジンジバショリにして、下にモモヒキをはいた。	沼1_図254_モモシキ、モモヒキ
もんべ	モンベ	モンベ	戦前の女性のノラギは、平野部や緩斜面の田畑では、長着をハショリにし、帯や前掛で締めた。深田を持ち、かつ山仕事の多い地域では、ジバンに腰巻・ダテマキ・前掛をし、手甲・脚絆をつけた。第二次大戦を機に、国防婦人会によってモンベ・標準着が広められると、モンベをはかなかった地域にも普及した。	沼1_図255_モンベ
脚絆	キャハン	キャハン、ケハン	男性がモヤや薪採りなど山仕事にスネを傷つけぬようズボンの上から当てた。足さばきがよくなり、畑仕事に履く人もあった。その後12枚コハゼの長い地下足袋が普及する。山付きの地域ではモンベ普及以前、女性の山仕事や冬場の必需品だった。	沼1_図256_キャハン、ケハン
草鞋	ワラジ	ワラジ	山仕事など足元を固めて臨む時に履いた。チが2つのものより4つのがより足になじむ。大正末タカジョウという底厚のチカタビが、更にゴム製チカタビが普及してワラジを履かなくなる。	沼1_図257_ワラジ
足袋	オカタビ	オカタビ	普段家で男性は木綿の黒・紺の足袋、女性は白いキャラコの足袋をはいた。これらをオカタビといった。	

名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
笠	トンボガサ	トンボガサ、トンボガサ、スゲガサ	日除け雨除け兼用の菅笠で男女とも頭に紐をかけてかぶる。農作業には男は雨天にのみ、女は日除けにもする。頭頂部をトンボ形に縛るためトンボガサの名がある。特殊な用例だが、内浦長浜の建切網漁で、魚見から漁船に合図を送る信号に使われた。 ※参考→「トンボ笠」『資料館だより』7巻5・6	沼1_図259_トンボガサ、トンボガサ
蓑	ミノ	ミノ	チガヤやオロを編んだ雨具。男性がトンボガサとともに着用した。梅雨時の田植にも着用したが、夏場はむれるので、ほとんど使わない。女性は炎天下での日除けや、雨天時に藁草のヒオイゴザ、ミノゴザ（油紙をはさんだもの）を背負った。	沼1_図260_ミノ
着莫産	ジューロータ	アマゴザ、アメゴザ、シッコイ、ケダイ、ヒヨケゴザ、ヨコテゴザ、チューロータ、セイタ、ヒッコエ、ジューロータ	薄い産に肩掛紐を2条つけてそれを腕に通し背に背負って田畑の耕作で太陽を避ける。また産に油紙をつけて雨天にも使用した。麦稈、藁、とうすみ等を麻糸等で織ったもの。背負うときの肩掛け紐は布縄やわら縄の細いものである。	
綜割（ふわり）	フワリ	フワリ	カセ（総）糸をイトワクへ巻き取るときに用いる。総糸をこれに掛け、ザグリにセットした糸枠に巻き上げる。また、杵に入れる緯糸をクダ（管）に巻き取る際にも用いられ、イトグリを通してフワリからツムに巻き上げをする。	沼1_図261_フワリ
座繰	ザグリ	ザグリ	繭から糸を引き出したリ、フワリにかけた総糸からワクへ糸を巻き上げたりする用具である。図に描いた反対側に竹製の振り子がつき、ハンドルを回すと振り子が左右に振れ、ワクにアミソ（ワクに巻かれる糸が交差してアヤになることをい、これで糸がからむを防ぐ）をつくり均一に巻き上げる。繭から糸を捕る場合は、七厘にかけた鍋で繭を煮ながら、何個もの繭からミゴボウキなどで糸口を引き出し、それを右手でとりながら左手でハンドルを回して巻き上げる。	沼1_図262_ザグリ
糸枠	ワク	ワク、イトワク	ザグリにつけて糸を巻き上げたり、ヘダイに糸を掛けたりする際に用いられる。ヘダイは複数の糸を掛けて用いるため、機織りする家ではいくつものワクが用意されていた。	沼1_図263_ワク
紡ぎ車	イトグリ	イトグリ	フワリにかけた総糸から、緯糸をクダに巻き取るのに用いる。イトグリの先に篠竹のクダを差したツム（紡錘）を取り付け、ハンドルをまわすと車からツムにかけた紐に運動してツムが回転し、糸を巻き上げる。このクダは杵に入れて使用する。	沼1_図264_イトグリ
杵	ヒヨ	ヒ	機織りは、ハタゴに掛けた総糸をソウコウで上下に分け、その隙間に緯糸を通し、オサ（箆）で打込み目を詰めていくが、その緯糸をスムーズに通すための道具。緯糸を巻いたクダを竹ヒゴに通し、それを杵の中央にはめ、側面の穴から糸を出して使う。	沼1_図265_ヒ
整経台	ヘダイ	ヘダイ	機織の経糸の長さを整える（「糸を経る」）のに使う大きな木枠。1反は2丈8尺で、織り縮み分を足した長さとする。ワク（糸枠）をヘダイの下に並べ置き、ヘダイの左右の突起に順次掛け、下まで掛けると糸を交差させ順次戻す。この交差をアヤといい、これで糸のからみを防ぎ、均一な経糸を確保できる。分解収納可。	沼1_図266_ヘダイ
高機	ハタゴ	ハタゴ、ハタオリキ	機織機具。養蚕家では出荷できない二つ繭や屑繭を利用して、農閑期に女衆が自家用の機織りをした。また木綿糸で、無地や縞柄などの布を織り、普段着に仕立てたり、裂き織りのボッコ帯なども作った。踏木が4本あるハタゴは綾織りなどの複雑な織りも可能だが一般には2本使いで平織りにした。	沼1_図267_ハタゴ、ハタオリキ
伸子針	シイシ	シイシ	割竹を曲げ、両端に針が埋めこまれたもので、機織りの際に、織り込んだ部分を布巻棒に巻き込むまで、これを両ミミに刺して一定の織り幅を確保するのに用いられた。	沼1_図268_伸子
食の用具				
貯蔵用具				
漬物石	オモシ	オモシ	漬物用の重り石。一抱えもあり、縄で吊り上げるよう上部に穴が開いている。	
角樽・祝儀樽	ツノダル	ツノダル、ヤナギダル	祝いの酒を入れる角付きの樽	
水甕	ミズガメ	ミズガメ	台所の流しのそばに置き、水汲みは女の仕事だった。昭和30年には水道が入り、使わなくなった。	
味噌甕	ツケモノガメ	ツケモノガメ	味噌を入れることもあった。味噌は1斗甕や3斗のミズガメに入れることもあった。	
焼酎甕	ショウチュウガメ	ショウチュウガメ	ラッキョウをつける。醤油を入れる。	
梅干甕	カメ	カメ	梅などを漬けるのに台所で用いた。	
缶	ドウコ	ドウコ	ブリキの一斗缶。干し柿や茶葉を入れて保存したり、魚の干物を入れて行商した。魚行商（ボテー）が使用した。底に目方買いをした水を切って入れ、塩を振り手拭いなどで覆い、中段に板製のスノコを渡して棚にする。棚にイワシやサバなどの鮮魚を入れて自転車などの荷台に付けて、三島方面や田方方面に行商に出た。	
茶缶	チャカン	チャカン	ブリキの缶。お茶の葉を入れた。	
魚籠	サカナカゴ	サカナカゴ、ウオビク	長方形の平らなカゴに吊り手が付くものもある。ヒラキなどを作るため、魚を干すのに使用。	
塩籠	シオイザル	シオイザル、シオカゴ、シオビク		

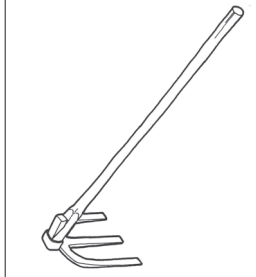
名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
炊事用具				
柄杓	シャーク	シャーク	水など液体を組む用具。木・タケ・金属で作った筒状の容器に柄をつけたもの。	
米研桶	コシドケ	コシドケ	米を研ぐ桶。(静浦村史に記載あり)	
焼き串	ヨーグシ	ヨーグシ	魚串。竹を採ってきて細く裂いた。焼き串にする。薬を束ねたアラマキに差しておいた。	
炒鍋	イリナベ	イリナベ	うどん粉を練って干した野菜などを入れたナベヤキなどを焼く。	沼3_p08_煎鍋
水囊	ソバスクイ	ソバスクイ、ニアゲ	煮たりゆでたりしたものをすくう柄付きの笊。	
蒸籠	フカシ	セイロ、フカシ	蒸籠。5、6月に田子の浦から生簀を安く売りに来たので、ナマリにするのに、これを用いた。赤飯を作ったり、餅を搗く時にも使う。沼津の町場からフリーヤが来て直した。	
	ムシキノワ	ムシキノワ	蒸し器の輪。セイロと湯を沸かす釜との隙間をふさぐための薬製の輪。	
笊	イザル	イザル、イザロ		
茶碗籠	チャワンカゴ	チャワンカゴ	洗った食器の水切りに使った。	
目籠	メカゴ	メカゴ	里芋など泥のついた野菜を洗って水切りに。	
飯櫃	オヒツ	オハチ、オヒツ	炊いたご飯を釜から移し保存する。サワラ材が水蒸気を吸い、ご飯が乾燥せずほどよい状態を保つ。寒い時期には、薬で編んだオヒツ入れに入れて保温した。	沼3_p05_飯櫃
お櫃入れ	オイツイレ	イズミ、オヒツイレ、ヒチカブセ、ヤナ、ワラビツ	オヒツを入れて保温する薬製容器。毎年9月ごろ紙を張り重ね、網屋から洪を買ってきて塗った。	沼3_p05_飯櫃入れ
飯籠	ザルオハチ	ザルオハチ、メシイザロ、オヒツイザロ、オヒツカゴ	4脚のつく蓋付籠で、夏はオヒツの代わりにご飯を入れ、涼しいところに吊した。以前は麦飯を主食としたためいたみやすく、このような通気性のよいものに入れた。	沼1_図285_ザルオハチ、ザル
蒸籠	セイロ	セイロ	サツマイモなどふかしたり、ハンペン等を作るときに茹で上げたものを水を切るためこれに入れておく。昔、家の人たちが作ったもの。(大正8年生) 蓋のない長方形の浅い箱で、底が割竹のスノコ状になったもの。	
煮籠	ニカゴ	ニカゴ	魚をのせて煮たり蒸したりすることで形が崩れないようにする。	
束子	ターシ	ターシ	鍋釜を洗うときに使用。	
篩	ササラ	ササラ	小割りした竹を束ねたもの。桶などを洗うときに使用。	沼3_p08_ささら
茶釜	カンス	カンス、チャガマ、ユワカシ	弦付きの湯沸かし用の釜で、イロリの自在鉤に掛けて用いた。湯が沸くと柄杓で汲み出した。	沼1_図269_カンス、チャガマ
		チャガマ、カンス	ヘツツイに据えられる湯沸かし専用の釜。焚き口が二口の石ベツツイでは、鍋釜を2つ据えられた。のちに普及したレンガやタイル貼りのものには中央奥にチャガマ専用の据え口が設けられ、余熱で湯を沸かすことができた。	沼1_図272_チャガマ、カンス
鉄瓶	テツピン	テツピン	イロリでの湯沸かしに用いたもので、茶の間のイロリには自在鉤に常時掛けられていた。注口がある。	沼1_図270_テツピン
鍋敷	ナベシキ	ナベシキ	薬束で輪を作り、それを芯にして上から薬で編んだもので、ヘツツイ(籠)で煮炊きした鍋釜を降ろす時にこれを敷いた。薬のほかには板製の四角いものもあった。	沼3_p07_釜敷
羽釜	ニシヨウガマ	ニシヨウガマ	小振りな羽釜で、少人数の飯を炊く際に用いられたものである。一般家庭では通常は五升釜が用いられた。	沼3_p07_羽釜
釜の蓋	カマノフタ	カマノフタ	厚手の板で円板状につくり、取手を2つつける。	沼1_図273_(二升釜の)蓋
調理・加工用具				
刺身包丁	オロシボウチョウ	オロシボウチョウ	刃先の尖った柳刃包丁。鱧節製造用具。	
出刃包丁	デバ	デバ、ヒラキボウチョウ	「正秀」銘入りあり。沼津市町方の刃物商。厚みが少なく軽い。	
俎板	キリバン	キリバン	水産加工用、俎板、七草粥で七草を叩く。	
魚桶	ヨーバチ	ヨーバチ	魚鉢。小判型の蓋付の半切桶。魚を入れたり、上に蓋を返して渡し、まな板にして調理をする。海上で漁師も使った。	
飯台・鮓桶	ハンダイ	ハンダイ	飯台。炊いたご飯を入れる大きな桶で、人寄せにスシを作るのに使う。やや上げ底になっていて、手を掛けられるように底の縁に切込みがある。上棟式ではお供えを屋根に上げる。	沼1_図290_ハンダイ
米搗臼	イシウス	イシウス	搗き臼の一種。穀物の精白に用いる。餅搗き臼よりも深く割って、縁を内湾させ、中身を飛び出しにくくしたものもある。	
小白	ヤコメウス	ヤコメウス	余った種籾を搗く小さな臼。煎ってヤコメ(焼き米か)にして食べた。ヤコメは畑の鳥除けに供えたりもする。苗代にまく種籾のうち、残ったものを3日間くらい水を換えながら浸しておく。これを20分くらい蒸してから炒り、熱いうちに臼で搗く。別に大豆も炒ってあわせておき、お菓子代わりにつまむ。(静岡県のお食事・御殿場)	
杵	キネ	キネ	杵。臼で穀物や餅や味噌などを搗くときに用いる。	

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
挽臼	ウス	ウス	コガシ（大麦を炒って挽く）、トリコ（米の挽き粉）、黄な粉、団子の粉など何を挽くにも用いた。白挽きはほとんど女衆の夜なべの仕事だった。大豆などをすりつぶすのに使った。醤油づくりをした。石臼として使わなくなってから、漬物の重石として用いた。	沼3_p08_石臼
臼敷	ウスシキ	ウスシキ	石臼の受け台にする。特に自家用の豆腐を調整するのに、冷やした大豆を挽いて粉水を作るので、ウケグチがつく。榎の削りもの。江戸末期に製作。	
捏ね鉢	カプトバチ	カプトバチ(陶器)、キバチ	団子を捏ねるのに主に使用。ウドンやソバの粉を練る。戦争中食べるものがなくて、イモの粉を捏ねて使ったことがある。イモの粉が配給になった。	
押し板	ノシイタ	ノシイタ、ウドンノシダイ	搗きたての餅や、捏ねたうどん粉・そば粉を広げ伸ばすのに用いる大きめの板。	
押し棒	ノシボウ	ノシボウ、ウドンボー、ソバボー	搗きたての餅や、捏ねたうどん粉・そば粉を広げ伸ばすのに用いる細長い棒。	
菱餅型	ヒシモチノカタ	ヒシモチノカタ	押し餅に当てて使う菱形の板。1尺ほどの長さ。	
播粉木	スリコギ	スリコギ、メグリボウ	春の七草を俵板の上で歌いながら叩く。包丁のミネやしゃもじ、火箸も使う。	
卸し器	オロシキ	オロシキ、オニオロシ、スリキ	食物（主に根菜類）を搾り下ろすのに用いる突起や刻み目のついた道具。	
篩	フルイ	フルイ、フリー、トオシ、コヌカドオシ、サヌケトオシ	篩い分け選別に使用。回転させるように振ったり杵を軽く叩いたりする。明治末期に篩の行商人が吉原方面から売りに来た。	
味噌漉	コイザル	ミノコシ、コイザル	味噌を濾すための小形の笊。	
醤油濾し	ショウユノス	ショウユノス	もろみの中に差し立てて醤油を濾す円筒形の籠。自家製しょうゆの道具。	
焼き型	カシヤキ	カシヤキ	トモエヤキ・ギシヤキともいうメリケン粉と卵を材料にした菓子を焼いた。	
豆腐箱	ノセバコ	ノセバコ	豆腐をつくる箱形の型。固まりかけた豆乳を流し込み、水分を抜く。	
巻き簀	スノコ	スノコ	海苔巻や伊達巻などを巻く小形の簀、簾。	
まんりき	キリン	キリン	鉄の万力。醤油製造用具。大工用具にもあり。	
杓文字差	ヤロー	ヤロー	丸竹の節ごとに斜めに切り口をあげ、流しの脇などに吊しておいて杓文字や箸などを差し入れておく。	沼2_p015_ヤロー（シャモジサシ）
弁慶	アラマキ	アラマキ、ワラマキ、チト、チマキ	魚串をさしたり、道具をさしておく。採集時にはツモヤサシ、竹べらなどがさしてあった。魚を串刺しにして乾燥させるのに使う。いちど遠火で焼いたものをこれにさしておき、甘露煮などにして食べた。御殿場ではこれをヤロウと呼ぶ。	
笊	ザル	ザル	米や餅米、野菜を洗って水切りしたり、苗代での稲蒔きをしたりするのにも用いられた。	沼1_図274_ザル 沼1_図277_ザル
臼	ウス	ウス	餅搗き用の二升臼で、たいていケヤキで製作される。かつては脱穀した麦を搗く底の深い臼もあった。	沼1_図276_ウス
杵	キネ	キネ	餅搗き用の杵で、力のある人は重いものを作った。搗き始めに小搗きをして練り、粘りが出ると杵を振り上げて搗く。	沼1_図275_キネ
木鉢	コネバチ	コネバチ、ネリバチ	木を削り貫いて製作された木鉢で、うどんやソバ、ダンゴの粉などをこねるのに使用する。テックリという削り貫き専用刃物を用いて製作される。	沼1_図278_コネバチ、ネリバチ
播鉢	スリバチ	スリバチ	内側に櫛目のある鉢で、スリコギ（メグリボウ）でゴマや味噌などを播り、あえものなどを作るのに用いる。	沼1_図279_スリバチ
播粉木	メグリボウ	メグリボウ	スリバチでゴマや味噌などを播るときの棒。	
製麺機	セイメンキ	セイメンキ、ウドンウチキ	小麦を作ったころ、普段ウドンやソバなどの麺類をよく作った。多く作る家でこれを使用。伸ばした生地を入れると麺になる。	沼1_図280_セイメンキ
焼酎甕	ショウチュウガメ	ショウチュウガメ	焼酎を入れる容器だが、農家ではラッキョウ漬けを作るのに用いた。あえて人のよく通るような場所に転がしておき、通る度にカメを転がし頻りに攪拌させるとおいしく浸かるといわれた。ラッキョウが浸かると、小さい口から長い菜箸などで取り出しては必要な分を食卓に出した。	沼1_図282_ショウチュウガメ
醤油搾り機	ショウユシボリ	ショウユシボリ	もろみから醤油を搾り取るのに使用したフネと圧縮装置が一体になった搾り機である。晒しの袋にいられたもろみをフネに入れ、上からハンドルで圧縮すると、下の溝から醤油が垂れてくるので、それを集めて仕上げ煮をする。	沼1_図283_醤油搾り機
飲食器				
箸入れ	ハシバコ	ハシバコ	箸を入れる容器。	
小皿	オテショ	オテショ、テショー	1人づかいの小さな皿。漬物やナメシソなどのちょっとした副食を入れるのに用いる。	沼1_図287_小皿、手塩皿
大皿	サシミザラ	サシミザラ	数人前を盛り合わせる大きな皿。磁器製のやや深さのある皿で、人寄せの会食などには刺身などを盛って出し、普段使いならば煮物などを入れた。	沼1_図288_刺身皿

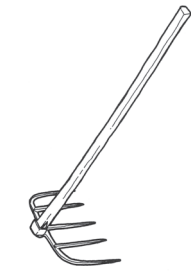
名称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説明	画像ファイル名
重ね鉢	マルジュウ	マルジュウ、オジュウ	磁気製の蓋付き重ね鉢で、正月などのあらたまった席で、年始に来た客へのもてなしに煮しめなどを入れて出した。オジュウには、漆器の角型ジュウバコもあるが、これは祝事に赤飯やアンピン餅などを入れて親類・近所に配る際に用いられた。	沼1_図289_オジュウ、マルジュウ
陶器	セテモン	セテモン	陶器製の食器をいう。瀬戸物。	
椀	ツボ	ツボ、オツボ	飯や汁、菜などを盛る“1人用”の飲食器。	
平椀	オヒラ	オヒラ	椀の一種。特別な日（ハレの日）に用いる。漆塗りの蓋付き椀。平たく大きめで、煮物などのおかずを盛る。	
折敷	オシキ	オシキ	食物を載せる台。古くは食事用だが、現在は神仏の供え物を盛る。スギやヒノキの薄い板に浅い縁をつけた形。	
膳	ゼン	ゼン、デン	料理を載せて供する台。	
酒器				
酒樽	サカダル	サカダル	下方に栓が付く1斗5升樽で、小売り用の酒樽である。	沼1_図291_サカダル
貧乏徳利	ビンボウドックリ	トックリ、ビンボウドックリ	陶器（美濃焼）の一升徳利の通い容器で、酒屋が客に貸し出したものである。その日の晩酌分を酒屋へ買いに行き、はかり売りをしてもらった。このような酒の通い容器は、中部地方では美濃焼が多い。口にシヨロの紐をつけ吊り下げて使う。	沼1_図292_トックリ、ビンボウドックリ
運搬・携帯用具				
切溜・入子	ナナツバチ	ナナツバチ	昭和40年代まで使用。「お煮しめ」をいれる。収納する時に蓋と身をそれぞれ7つずつ入れ子になって重なるのでこの名がある。正月のご馳走を入れるのに主に使った。暮れになるとおばさんに手伝いに来てもらってごちそうをたくさん作る。商標あり 伊勢山田岡本町萬塗物問屋片岡善兵衛	
重箱	オジュウ	オジュウ	同形の箱を何段も重ねておくことができる容器。一番上に蓋がつく。ハレの日のご馳走や、行楽時の弁当、田植えや稲刈り時の飯入れ、近所へのお裾分けなどに用いた。	
広蓋	モロバコ	モロバコ、ムロバコ	諸蓋・麴蓋。コウジをねかせる平箱で、味噌、醤油、なめ味噌を作る。いくつも重ねて使う。人寄せの時に煮物の器を運んだり、餅を丸めて並べたりするのにも使う。1尺×2尺×1寸5分程度。	
提重	ワリコ	ワリコ	同形の小型の重ね容器を、持ち運びできるような箱に入れる。芝居見物や屋外の行事につかう弁当入れ。中に酒を入れる容器もある。田植えにもつかった。明治初期に、建具職人に注文。浮島地帯どこの家にもあった	
弁当入れ	ウミハンダイ	ウミハンダイ、ハマハンダイ、ネコサイベントウ、メンバ、チゲ	小型のおひつ（被せ蓋がつく桶形）を海に出るときに弁当入れとして漁師が使用する。網袋に入れ、おかず入れも。 ※参考→「漁民の弁当箱—チゲとメンバ—」『資料館だより』7巻3	
弁当行李	メンツ	メンツ	弁当入れ。野良へもって行きオヒルに食べる。ご飯は少し残しておいてオユージャにも食べる場合があった。オヒルは午前10時～10時半ごろ。オユージャは午後2時ごろ。	
水筒	チャダル	チャダル、ミズタル、ヤナ、チャヤナ	小型の水樽を農作業や漁などに携帯。水のほかお茶を入れる。野良仕事に持参。杉の角付桶で提手がつく。いつまでも冷たいまま保てる。野良弁当に欠かせない。1升、2升、3升入りの3種がある。大正末期に桶屋が製作。篠竹を差した吸口から直接飲むこともあった。	沼1_図286_ヤナ、ヤナダル、チャダル、チャヤナ
住の用具				
囲炉裏	ユリイ	ユリイ、ユルリ、イルリ	火床（火を焚く場所）の一種で、屋内の床や土間に四角く仕切って作った設備を指す。煮炊きや暖房に使う。	
自在鉤	ツツカギ	ツツカギ、カギド、カギンドウ（鉄製）	孟宗竹の節を抜いた竹筒に木製の棒が通され、棒の先端に鉤が付く古い形の自在鉤。天井の梁からイロリ（ユリイ）の上に吊るし、鉄瓶や鍋を掛けた。魚形の棧子を上げてゆるめると、鉤の高さが調節できる。	沼1_図293_ツツカギ
鉄器・焼台	テッキ	テッキ	囲炉裏用の網で、五徳のように足がついている。	
竈	カマド	カマド、クド、フド、ハツツイ、ドベツツイ	土で作ったカマド。カマヤに設置。	
釜輪	ワッパ	ワッパ	クドの付属品。使用する鍋や釜にあわせて口の大きさを調節する道具。輪状の鉄板。	
西洋竈	セイヨウハツツイ	セイヨウベツツイ	煉瓦を組んで作った煙突のあるカマド。	
竈	オウゴンカマド	オウゴンカマド	戦中戦後に平町で考案し作られたコンクリ製の竈。	
練炭起こし	レンタンオコシ	レンタンオコシ		
五徳	ゴトク	ゴトク	イロリや火鉢の灰に据える三脚で、鉄瓶や鍋などをのせ、湯を沸かしたり汁物を温めたりするのに用いた。	沼1_図294_ゴトク
火消壺	ケシツボ	ケシツボ、ヒケシツボ	ケシズミを入れる鑄物の蓋つき容器である。ハツツイやコタツの近くに置かれ、熾が出るとジュウノウでケシツボに移し密封して火を消した。ケシズミになると袋に入れて保管し、冬の暖房等に少しずつ使った。	沼1_図295_ケシツボ、ヒケシツボ
火吹竹	ヒフキダケ	ヒフキダケ	マダケの片側に節が付く、そこに小さな穴をあけたもので、カマドや風呂焚きなどに、節のない方を吹いて風をおくり火を起こす。	沼1_図296_ヒフキダケ

名 称	沼津の主な呼称	沼津での呼称	説 明	画像ファイル名
箱火鉢	ハコヒバチ	ハコヒバチ	内側が銅板張りの方形の箱形火鉢で、人寄せやお客の訪れたときのみ座敷で使用したものである。普段使いには、陶製の丸火鉢や小型のテアブリを使用した。また普段用いる火鉢には長火鉢がある。これはカッテのアカリハナや大黒柱近くに置かれ、家長やお爺さんがキセルをふかしながら座り、暖をとったものであった。	沼1_図297_ハコヒバチ
火箸	ヒバシ	ヒバシ	真鍮製の箸で、火箸の灰を整えたり炭を入れたりするのに用いる。イロリやハツツイ用には、2本に銀を通した鉄製の火箸が普段使いとして用いられた。	沼1_図298_ヒバシ
行火	マメタンアンカ	マメタンアンカ	中にマメタン（豆炭）を入れ、布団に入れて暖をとるアンカで、熱さを和らげるために布でくるんで使用した。図のアンカには、購入時に布袋がついていた。	沼1_図299_マメタンアンカ
湯たんぼ	ユタンボ	ユタンボ	中に湯を入れ、就寝時に布団の足元に入れる暖房具で、布や袋にくるんで用いた。翌朝になってもまだ暖かい湯は、冬場の洗濯に利用された。ブリキのユタンボ以前には、カマボコ型の陶器が使われた。	沼1_図300_ユタンボ

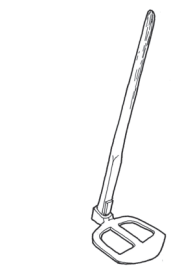
農耕用具【稲作用具】



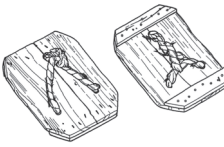
沼1_図001_マンガ、マンノウ、サンボンマンノウ



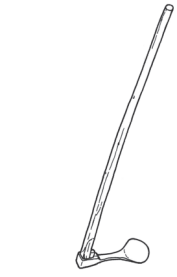
沼1_図002_コデギリマンノウ、コデギリマンガ



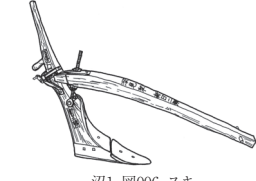
沼1_図003_オコシマンノウ、アーラオコシ



沼1_図004_アーラゲタ、アゼボクリ



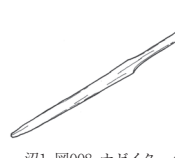
沼1_図005_カブクリ、カブクリグワ



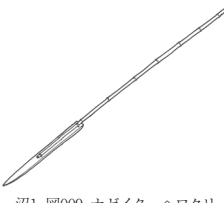
沼1_図006_スキ



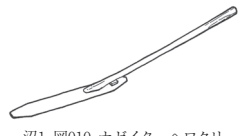
沼1_図007_アゼクリガマ



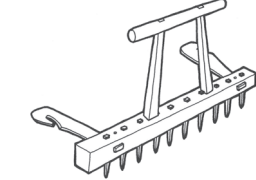
沼1_図008_ナゼイタ、ヘロクリ



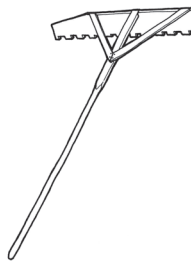
沼1_図009_ナゼイタ、ヘロクリ



沼1_図010_ナゼイタ、ヘロクリ



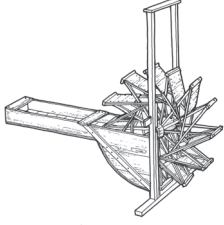
沼1_図011_マンガ、マンガア、シロカキマンガ



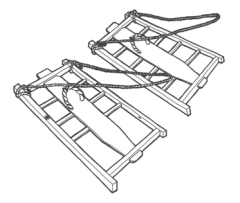
沼1_図012_ヘロクリ、エブリ



沼1_図013_トンボ、ナラシ、エブリ



沼1_図014_フミグルマ、ミズグルマ



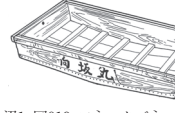
沼1_図016_オオアシ



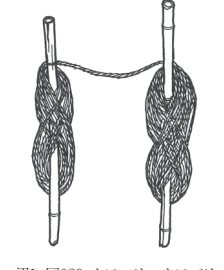
沼1_図017_カツンボウ、テンピンボウ



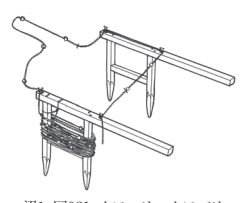
沼1_図018_バイスケ、ピヤースケ



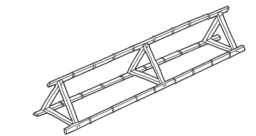
沼1_図019_フネ、タブネ、ヒヤーブネ



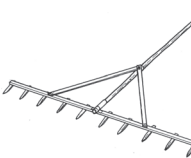
沼1_図020_ナワハリ、ナワバリ



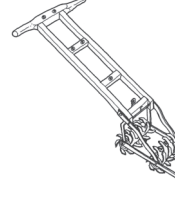
沼1_図021_ナワハリ、ナワバリ



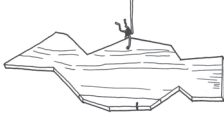
沼1_図022_ワク



沼1_図023_センビキ、スジヒキ



沼1_図024_コロカシ、コロバシ



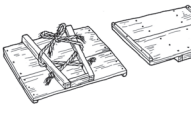
沼1_図026_カラス



沼1_図027_クサカリガマ



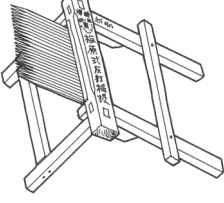
沼1_図028_イネカリガマ、ノコギリガマ



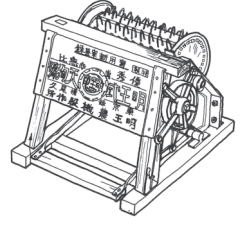
沼1_図029_ナンバ



沼1_図031_ツキトオシ、カツンボウ、トンガリボウ



沼1_図032_マンガ、センバコキ



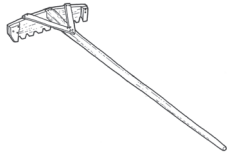
沼1_図033_イネコキキキヤア、アシブミ



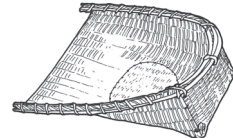
沼1_図034_カッギダワラ、ヒェアダアラ、ハイダワラ



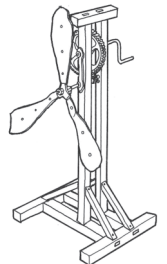
沼1_図035_ミシロ



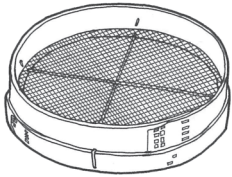
沼1_図036_へロクリ、ナラシ



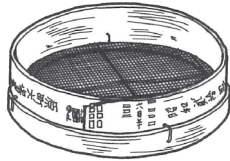
沼1_図037_ミ、フジミ



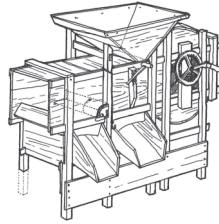
沼1_図038_センプーキ、カザグルマ



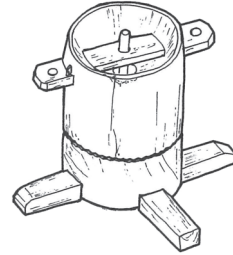
沼1_図039_アラドオシ、モミドオシ



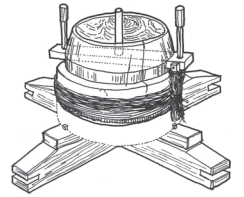
沼1_図040_トオシ、コゴメドオシ



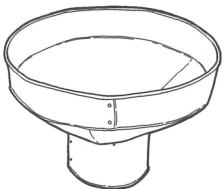
沼1_図042_トウミ



沼1_図043_カラウス(木摺白)



沼1_図044_カラウス(唐白)



沼1_図045_ジョウゴ



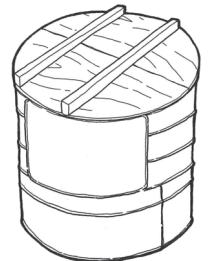
沼1_図046_サンダワラ



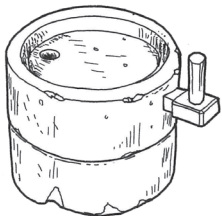
沼1_図047_テカギ



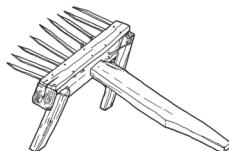
沼1_図048_サシ



沼1_図049_コケビツ、カンカラ



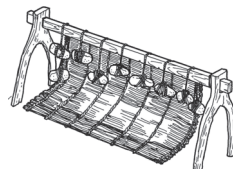
沼1_図050_ウス



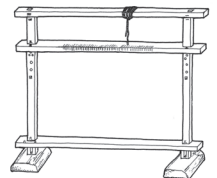
沼1_図051_マンガ、スグリダイ、ワラスグリ



沼1_図052_テツチ、ツチ

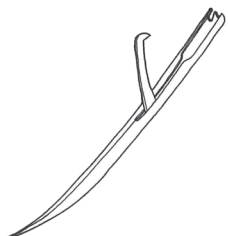


沼1_図053_タワラアミダイ・オモシ



沼1_図054_ミシロバタ

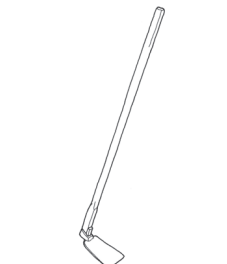
農耕用具【畑作用具】



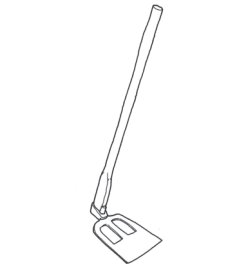
沼1_図057_カマさをとじる針



沼1_図058_オシキリ



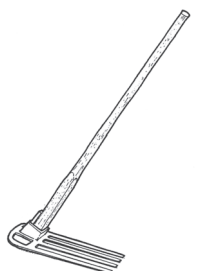
沼1_図062_トウグワ、トグワ



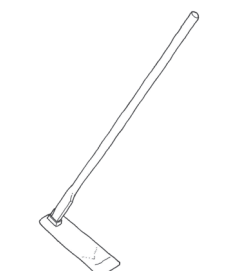
沼1_図063_メガネトウグワ、マドグワ



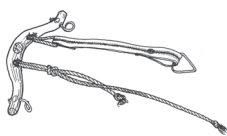
沼1_図065_マサオコシマンノウ



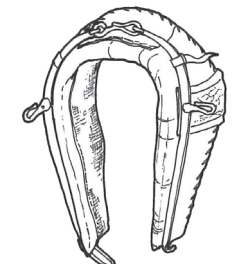
沼1_図066_マンノウグワ、ヨンホングワ



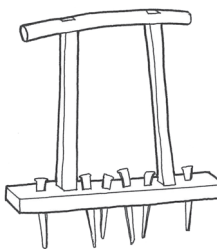
沼1_図067_ヒラグワ



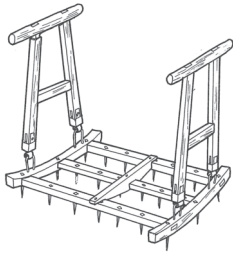
沼1_図070_クビキ



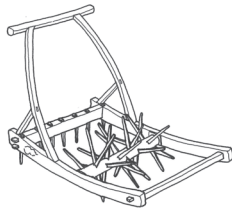
沼1_図072_ハモ



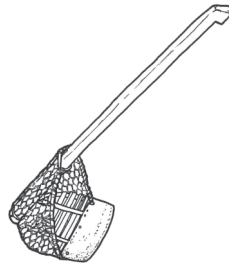
沼1_図073_ホウリマンガ、フリマンガ



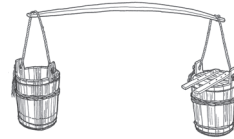
沼1_図074_ホウリマンガ、フリマンガ(二人用)



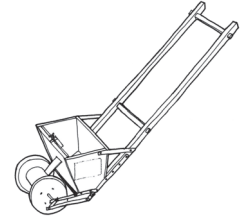
沼1_図075_ハッタンコロガシ



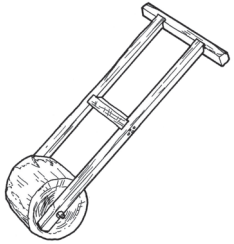
沼1_図077_ジョレン



沼1_図078_シヨンベンオケ、コエオケ



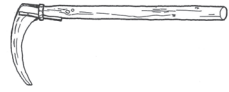
沼1_図080_ハシユキ、タネマキ



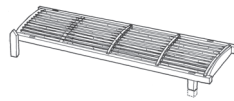
沼1_図081_麦踏機(ローラー)



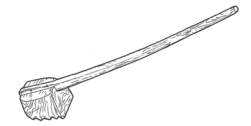
沼1_図082_ツチイレキ



沼1_図083_クサカリガマ



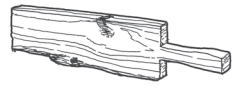
沼1_図084_ムギタタキ、ハタキダイ、ムギウチダイ



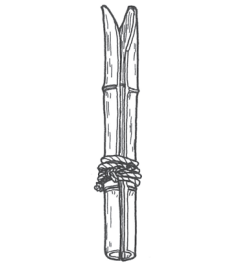
沼1_図085_オ、ツブデコーシ



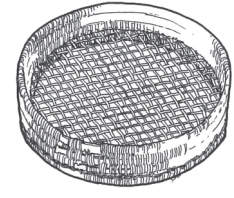
沼1_図086_オニバ、タタキ



沼1_図087_オ、コテ



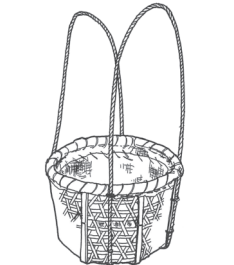
沼1_図088_マメコキ、コキハシ



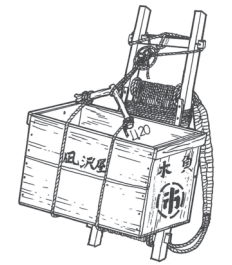
沼1_図089_トオン



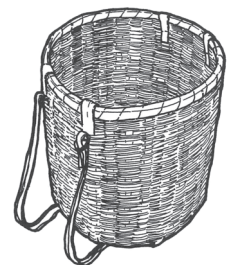
沼1_図105_ショイビク、カツギダワラ



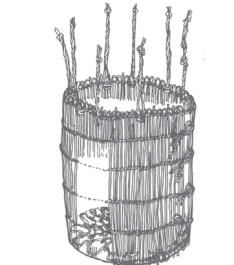
沼1_図106_カツギカゴ



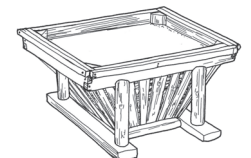
沼1_図107_ショイコ



沼1_図123_ショイカゴ

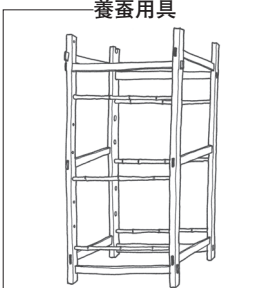


沼1_図124_タテ、タデ

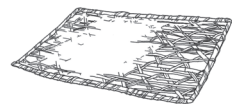


沼1_図128_ホイロ

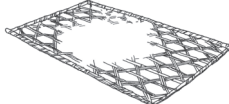
養蚕用具



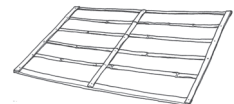
沼1_図129_タナ、カイコダナ



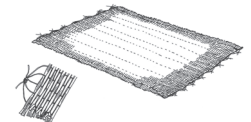
沼1_図130_ヒラカゴ、カゴ



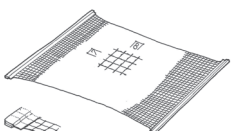
沼1_図131_ヒラカゴ



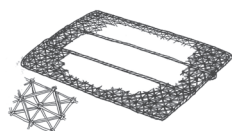
沼1_図132_ヒラカゴ、カゴ



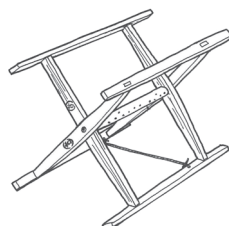
沼1_図133_オカイコミシロ



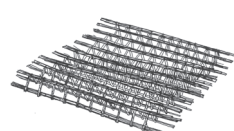
沼1_図134_アミ(糸網)



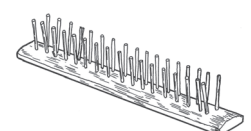
沼1_図135_アミ、リュウキュウ(琉球蘭網)



沼1_図136_ダイ、クワクレダイ

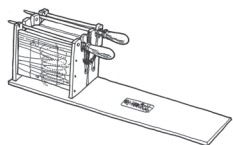


沼1_図137_モズ(島田炭)

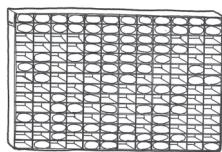


沼1_図138_モズ編み

山樵用具



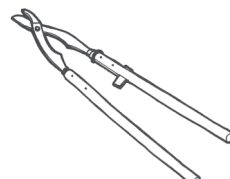
沼1_図139_モズオリキ



沼1_図140_回転モズ



沼1_図142_クワコキ



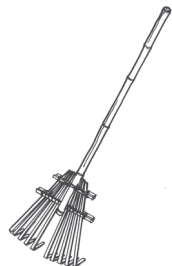
沼1_図143_クワキリバサミ



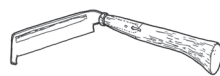
沼1_図144_シタカリガマ



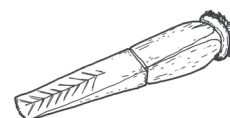
沼1_図145_クサカリガマ



沼1_図146_マンガア、クマデ、コマンザリヤア



沼1_図147_トビナタ



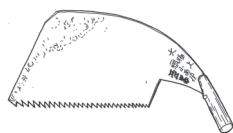
沼1_図149_ヤ、カナヤ



沼1_図151_クビツギ



沼1_図152_カイリョウノコ、マドノコ



沼1_図160_マエビキノコ



沼1_図154_トビ、トビグチ

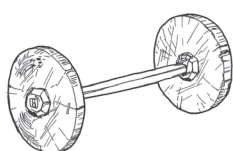


沼1_図155_カクマワシ



沼1_図156_カワムキガマ

漁撈用具〔網漁具〕



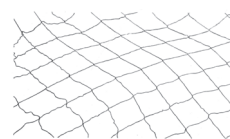
沼1_図157_ゴトグルマ



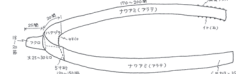
沼1_図158_ズリカン



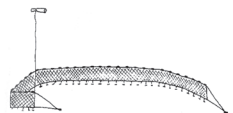
沼1_図159_ハナソリ



沼2_p009_オオアミ(部分)



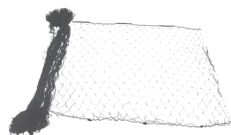
沼2_p026_イワン地曳網



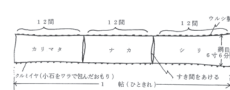
沼2_p029_ブリ刺網



沼2_p029_コザラシ網



沼2_p030_ヒラメ刺網



沼2_p031_ヒラメ刺網(1帖)



沼2_p032_手繰網



沼2_p034_シラス網



沼2_p035_揚げ網のカリテアミ(狩立網)とタイタ



沼2_p009_サンガイブネ



沼2_p024_オオナカ



沼2_p013_オオミネの魚見小屋



沼2_p015_ローファー



沼2_p015_トンボガサ



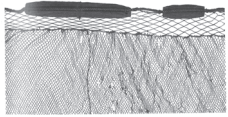
沼2_p015_ほら貝



沼2_p030_コザラシ網のアンバ



沼2_p032_アンバ



沼2_p033_手繰網アンバ(部分)



沼2_p023_タケタバ



沼2_p025_ピンダマ



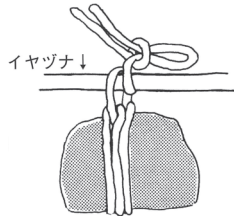
沼2_p044_浮樽



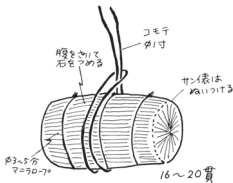
沼2_p020_イヤイシ



沼2_p020_イヤイシ2



沼2_p020_イヤツナ



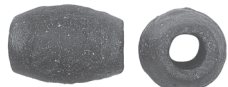
沼2_p023_定置網の土俵



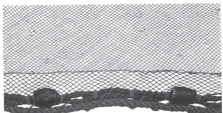
沼2_p030_コザラシ網のクルミイヤ



沼2_p031_ヒラメ刺網のクルミイヤ



沼2_p032_ヤキイヤ



沼2_p033_手繰網ヤキイヤ



沼2_p034_イヤ



沼2_p035_グイタ



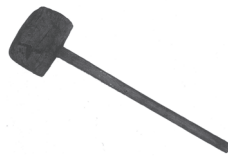
沼2_p011_シビカキ



沼2_p029_ブリカギ



沼1_図196_ブリカギ



沼2_p011_カケヤ



沼2_p025_タモ

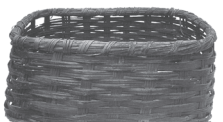


沼2_p028_イワシダモ

漁撈用具【釣漁具】



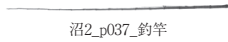
沼2_p028_イワシキリ



沼2_p028_カシアゲカゴ



沼2_p028_ウケトリバコ



沼2_p037_釣竿



沼2_p036_釣糸巻1



沼2_p036_釣糸巻2



沼2_p036_釣糸巻3



沼2_p036_釣糸巻4



沼2_p038_タイ一本釣用糸巻



沼2_p041_イカ釣用糸巻



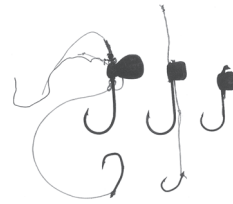
沼2_p042_マグロ立縄釣用釣鉤



沼2_p045_マグロ等延縄釣用釣鉤



沼2_p037_カツオ一本釣用釣鉤



沼2_p038_タイ一本釣用釣鉤



沼2_p039_カケド



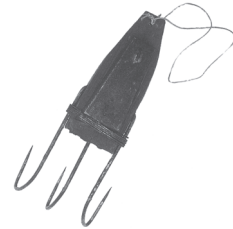
沼2_p039_カケドとホウデ



沼2_p041_コウイカー一本釣用釣鉤



沼2_p042_アカイカー一本釣用釣鉤



沼2_p042_タコツリ



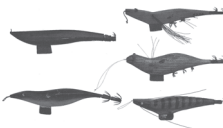
沼2_p039_ビシ(二本ホウデ)



沼2_p040_サッポロピン



沼2_p038_ウズワー一本釣用擬似鉤



沼2_p041_バショウヅノ



沼2_p040_ナマリヅノのレンケツ



沼2_p040_サッポロヅノ



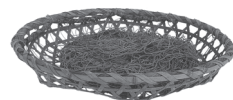
沼2_p037_餌桶



沼2_p042_立縄



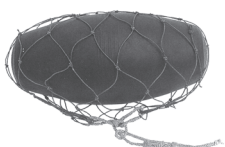
沼2_p043_タイ延縄釣漁



沼2_p043_ナワカゴ(タイ用)



沼2_p045_ナワカゴ(マグロ用)



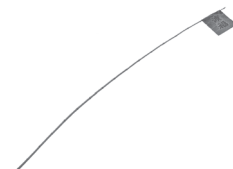
沼2_p044_フウセン(ウキ)



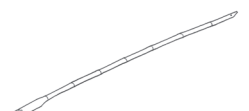
沼2_p044_浮き1



沼2_p044_浮き2

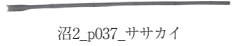


沼2_p045_モンゼンバタ



沼1_図191_ササカイ、ササキヤー

漁撈用具【突漁具】



沼2_p037_ササカイ



沼2_p036_ヨリモドシ



沼2_p047_ミツギフシ



沼2_p047_ツギドウ(ニホンドウ)



沼2_p047_イッポンドウ



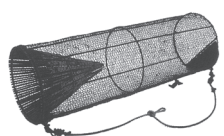
沼2_p047_スイガン



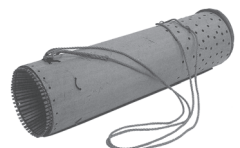
沼2_p047_アブラツボ



沼2_p049_アナゴ・ウツボ用モジリ

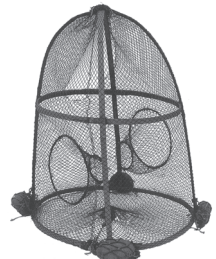


沼2_p050_アナゴ用モジリ



沼2_p050_アナゴパイプ

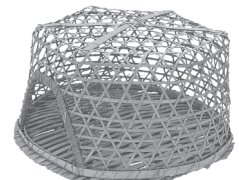
漁撈用具【陥穽漁具】



沼2_p048_カゴ1(釣籠型)



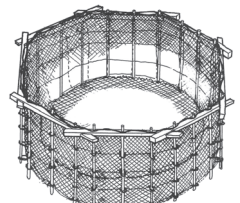
沼2_p048_カゴ2(箱型)



沼2_p048_ハズカゴ



沼2_p050_タコツボ



沼1_図189_ハコイケス、イケス

漁撈用具【船上用具】



沼2_p052_カシラセビ(アタマセビ)



沼2_p052_ホ



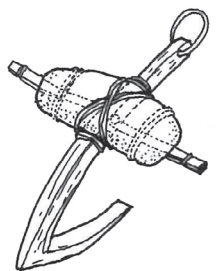
沼2_p052_ウチマワシ(スリ)



沼2_p052_ウチマワシ(スリ)2



沼2_p052_ホビツ



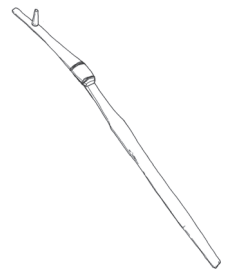
沼1_図166_イカラ



沼2_p054_テツイカラ



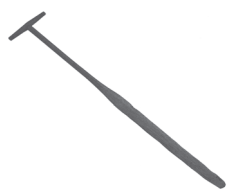
沼2_p054_イカラセビ



沼1_図169_ロ



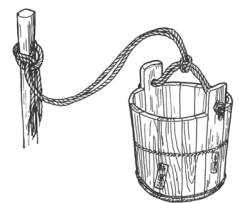
沼2_p053_イレッコ部分



沼2_p053_カイ



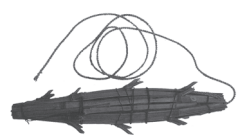
沼2_p052_カジ



沼1_図172_カシオケ



沼2_p055_アカトリ



沼2_p056_カッテ(スバル)



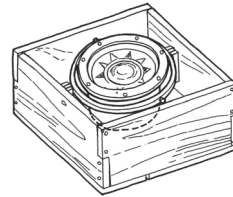
沼2_p055_トバ(トマ)
内側 外側



沼1_図177_フナダミサン、フナガミサン、フナダマサマ



沼1_図178_船磁石



沼1_図179_ラシンパン



沼2_p056_カンテラ(テールランプ)



沼2_p056_ユセントウ(船尾灯)



沼2_p056_白灯(停泊灯)



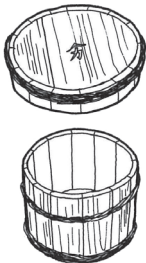
沼1_図183_ミズダル



沼2_p057_ミズダル



沼2_p057_ミズダル2



沼1_図185_チゲ、メンバ、ウミハンダイ



沼2_p057_チゲ(メンバ)



沼2_p057_チゲ袋入りのチゲ(弁当桶)



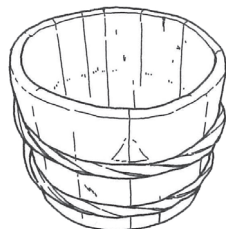
沼1_図185_チゲブクロ



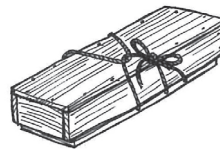
沼2_p057_ツト(弁当入れ)



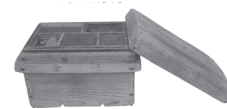
沼2_p058_ヨーパチ



沼1_図190_エサオケ、エサパチ



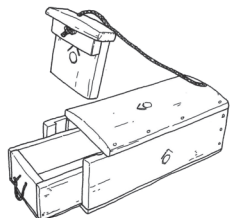
沼1_図192_ツリバコ



沼2_p058_オビツ(箱型)



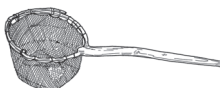
沼2_p058_オビツ(桶型)



沼1_図195_マクラバコ



沼2_p058_マクラバコ



沼1_図197_タモ



沼1_図201_ピク



沼2_p055_カシオケ(ツルベ)

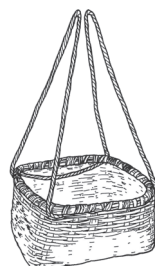
漁撈用具【水揚げ用具その他】



沼2_p028_ケンチマス

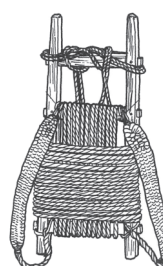


沼1_図199_サカサダル

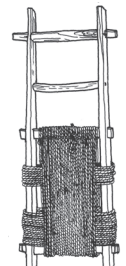


沼1_図200_カシアゲカゴ

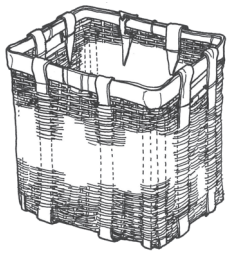
運搬用具



沼1_図227_ショイコ



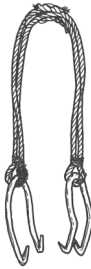
沼1_図228_ショイコ



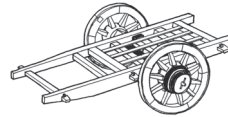
沼1_図229_ショイカゴ



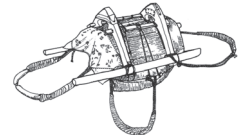
沼1_図230_カツギダワラ、ヒラダワラ



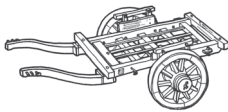
沼1_図231_カギ



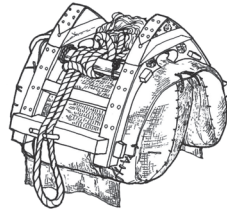
沼1_図232_ニグルマ



沼1_図233_コニダ



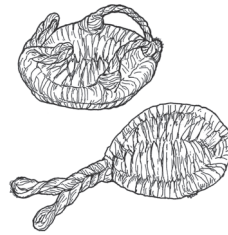
沼1_図234_バリキ



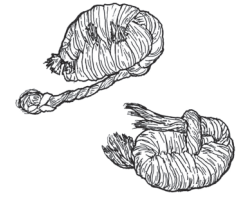
沼1_図235_ウマのクラ、シンチュウグラ



沼1_図236_セビ

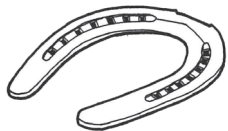


沼1_図237_牛のワラジ

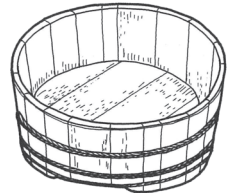


沼1_図238_馬のワラジ

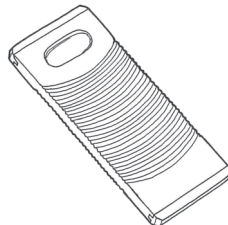
衣の用具



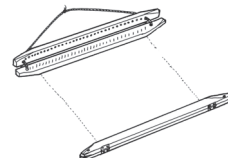
沼1_図239_カナグツ



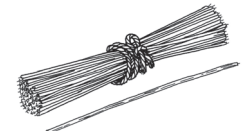
沼1_図240_タライ



沼1_図241_センダクイタ



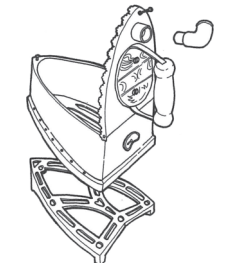
沼1_図242_ハリテ



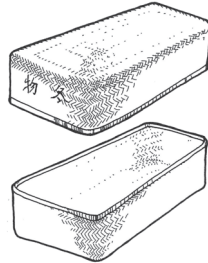
沼1_図243_シンシン



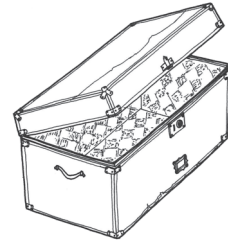
沼1_図244_ヒノシン



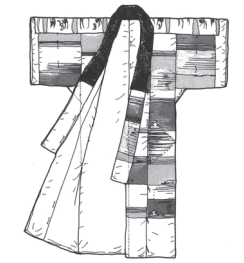
沼1_図245_アイロン・台



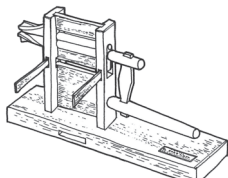
沼1_図246_タケゴウリ



沼1_図247_衣装箱



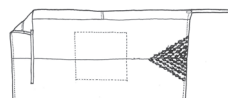
沼1_図248_ヨナギ



沼1_図249_ワタクリキ



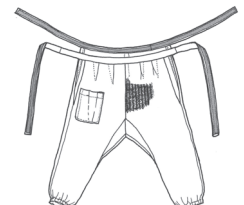
沼1_図250_タウエボッコ、ノラジュバン、ジバン



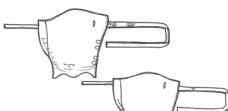
沼1_図251_オコシ、コシマキ



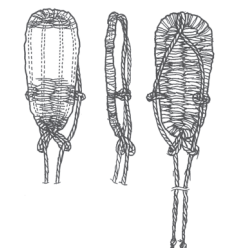
沼1_図254_モモシキ、モモヒキ



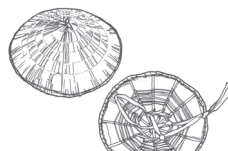
沼1_図255_モンペ



沼1_図256_キャハン、ケハン



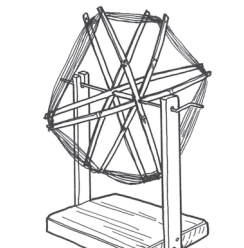
沼1_図257_ワラジ



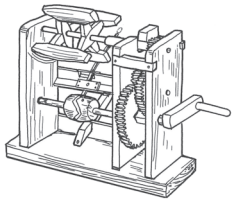
沼1_図259_トンボガサ、トンボガサ



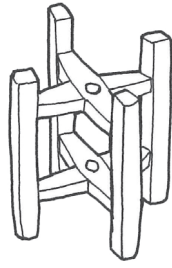
沼1_図260_ミノ



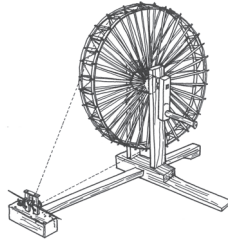
沼1_図261_フワリ



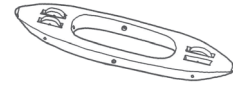
沼1_図262_ザグリ



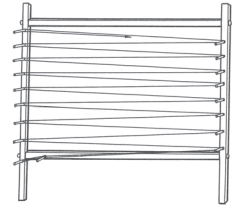
沼1_図263_ワク



沼1_図264_イトグリ

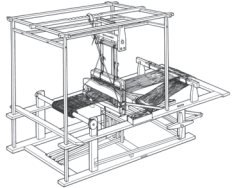


沼1_図265_ヒ



沼1_図266_ヘダイ

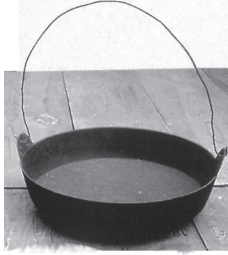
食の用具



沼1_図267_ハタゴ、ハタオリキ



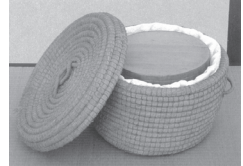
沼1_図268_伸子



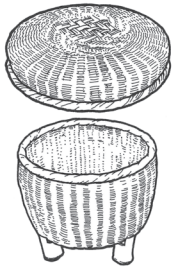
沼3_p08_煎鍋



沼3_p05_飯櫃



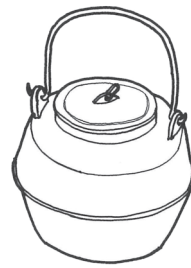
沼3_p05_飯櫃入れ



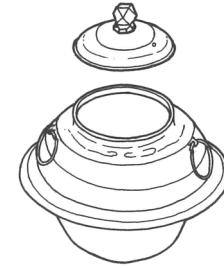
沼1_図285_ザルオハチ、ザル



沼3_p08_ささら



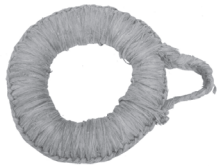
沼1_図269_カンス、チャガマ



沼1_図272_チャガマ、カンス



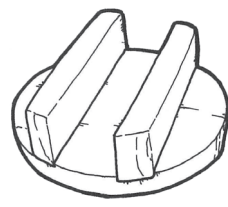
沼1_図270_テツピン



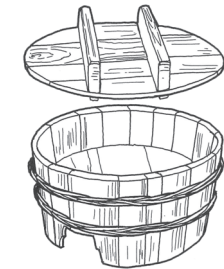
沼3_p07_釜敷



沼3_p07_羽釜



沼1_図273_(二升釜の)蓋



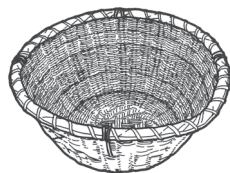
沼1_図290_ハンダイ



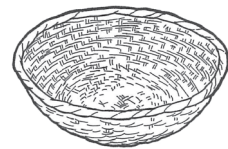
沼3_p08_石臼



沼2_p015_ヤロー(シャモジサシ)



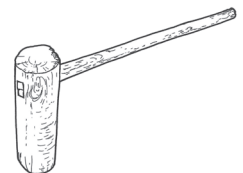
沼1_図274_ザル



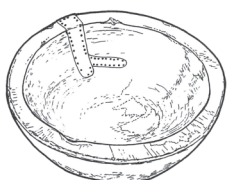
沼1_図277_ザル



沼1_図276_ウス



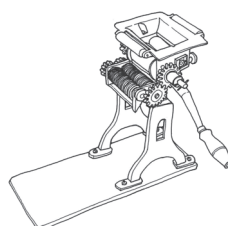
沼1_図275_キネ



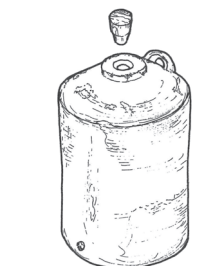
沼1_図278_コネバチ、ネリバチ



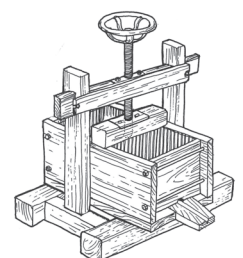
沼1_図279_スリバチ



沼1_図280_セイメンキ



沼1_図282_ショウチュウガメ



沼1_図283_醤油搾り機



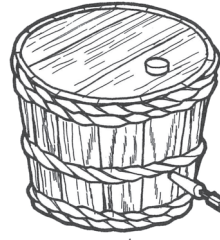
沼1_図287_小皿、手塩皿



沼1_図288_刺身皿



沼1_図289_オジュウ、マルジュウ

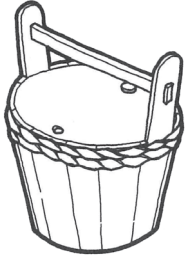


沼1_図291_サカダル

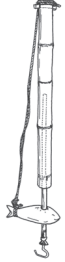


沼1_図292_トックリ、ビンボウドックリ

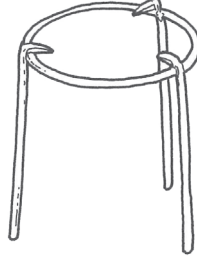
住の用具



沼1_図286_ヤナ、ヤナダル、チャダル、チャヤナ



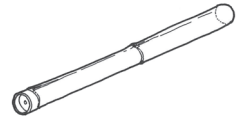
沼1_図293_ツツカギ



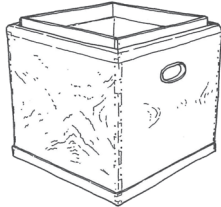
沼1_図294_ゴトク



沼1_図295_ケシツボ、ヒケシツボ



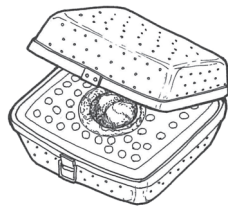
沼1_図296_ヒフキダケ



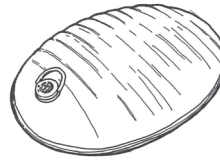
沼1_図297_ハコヒバチ



沼1_図298_ヒバシ



沼1_図299_マメタンアンカ



沼1_図300_ユタンボ

「沼津の民具」解説

神野善治

ここでは、静岡県沼津市域で使われてきた民具名の一覧表について解説する。この表にリストアップした民具は複数の資料から抽出したものであるが、主要部分は平成14年刊行の『沼津市史 資料編民俗』付録「民具図集」⁽¹⁾に依拠した。

この民具図集は、筆者が監修を担当し、民具の個別の解説と作図編集を外立ますみ氏が担当して約280種類の民具を紹介したものである。沼津市域は駿河東部と伊豆北西部に跨り、同じ市内でも民具のあり方に若干の違いが見られ、『市史』の趣旨に沿って、市域全体の民具の特徴に配慮して編集を行っている。また、この民具図集で足りない部分を、以下に示すような地域的特色を持つコレクションより補強した。

取り上げた民具の主なもの、①愛鷹山麓の畑作用具と養蚕用具、浮島が原の湿田農耕用具（主に「愛鷹民具館」の約630点の民具の中から抽出）、②西浦のみかん農園の栽培用具（木負みかん園資料などから）、③静浦の石工用具（沼津市歴史民俗資料館収蔵資料など）、④静浦・内浦の漁労用具（重要有形民俗文化財に指定されている漁労用具から抽出）など特色ある民具が含まれており、その他にそれぞれの地域の衣食住関連の民具を加えた。

このうち、いくらか注目される民具とその名称について解説しておきたい。①の愛鷹山麓および浮島が原地区の民具では、湿田の農耕用具に特徴が見られる。深田ではナンバと呼ばれる板状の田下駄が多用され、特に田植えが胸まで泥に浸かって行われた深田では、シロカキ作業で極端に横長の三尺ナンバと呼ばれる田下駄が履かれたのが珍しい。左右に跳ね上げながら、まるで「花魁（おいらん）」のように一歩ずつ前進し、柄の長い平鍬（マンノウ）で田うないをした。田起こし作業では、泥炭質の田に生えた葦やマコモなどを起こすのに、いわゆる窓鍬（ア－ラオコシとかオコシマンノウと呼ぶ）を用いた。また、深田でシロを整えるのには、オオアシと呼ばれる杵型の田下駄が活躍した。この作業をシロフミという。深田に足をとられないように履くのがナンバ（田下駄）に対して、オオアシは、履物ではあるが、いわばシロフミの農具だったといえる。杵前方に縛り付けた縄を左右それぞれの手で引き上げながら泥田を前に引きずり出し、後方の棧で泥土をかき慣らして歩くのだった。家々の田の深さに応じ大小さまざまなオオアシが用意されているのもこの地域のオオアシの特徴だろう。大きいものはタテ70cm余りもあり縦横に複数の棧がはめられている。また深田では田植えにも稲刈りにもタブネとかヒャーブネと呼ばれた田舟が活躍した。

裏面をいくらか反らせた箱型で、刈った稲を乗せて濡らさないよう田面を曳いた。田植えにかぶった菅笠はトンボガサと呼ばれる。名の由来は頂上で菅を束ねてトンボ型にまとめていること。遠くにトンボガサが落ちているようなので、拾いに行くと、実は深い田で胸まで浸かって田植えをしていたのだという「一つ話」が語られていた（詳細は注2、3参照）。

乾田では、三本鍬（三本マンノウ）でうない、牛馬が入れるところでは、いわゆる馬鍬（マンガ、シロカキマンガ）を曳かせてシロヅクリを行った。⁽²⁾⁽³⁾

愛鷹山麓などの製茶用具には、茶摘籠や背負籠が含まれているが、他の農具類に共通する運搬具なので、表では、茶鋏、タテ、ホイロ（焙炉）だけを取り上げた。タテは摘み取った茶葉を運ぶ蔓を編んだ大型俵状の容器。昭和後半から用いられた新しい民具だが、素材は伊豆・富士方面まで採取に出かけた。伝来元は不明。通気性がよく丈夫で茶葉が傷まないすぐれものだが、布袋が普及してとってかわられた。

養蚕用具は御殿場や伊豆方面など盛んな地域とも共通する。沼津ではそれほど深い奥山は無かったが、愛鷹山や西浦・戸田などの山地で木材の伐採・搬出が行われていた。天竜地方などからの出稼ぎがあった。伐採用具・搬出用具などを若干とりあげることができた。

漁撈用具は、大きく4地区に分けてとらえられる。①駿河湾に面した原・片浜地区で地曳網漁が行われ、今も観光地曳として生き延びている。②狩野川口の我入道から静浦地区は小釣漁師が多かった地域である。静浦志下地区や伊豆西海岸の戸田などは遠洋漁業が盛んな港町であった。③静浦の江浦・口野辺りから内浦にかけて海岸に山地が迫り、急深で入り組んだ地形の海岸線が続く。この地形を利用した建切網漁が盛んだった。特に内浦は、江戸初期からの漁業関係文書資料が豊富に残り、アチックミュージアムを創設した渋沢敬三が収集した『豆州内浦漁民史料』がとりわけ有名である。内浦長浜の津元大川四郎左衛門の家に代々伝えられてきた文書である。これらの地域で収集した漁労用具から、典型的なものをリスト化した⁽⁴⁾。

④河川や沼池などの内水面の漁労用具としては、浮島沼の漁労用具や狩野川のモジリ漁に特徴が認められ、沼津市歴史民俗資料館では、1981年に「モジリ・ウケの世界」と題して企画展を開催した。この地域と静岡県各地のウケを中心に、日本の主要なウケのコレクションと国立民族学博物館所蔵の世界各地の同じ仲間ととらえられる漁具を紹介した。詳

しくは展示図録と研究紀要に関連記事を掲載したので参照されたい。

衣食住関連の民具は、市域全体ではほぼ共通しているようで、愛鷹民具館や歴史民俗資料館に沼津市内から収集された資料を基礎資料にしてリスト化した。かつて内田武志氏の『静岡縣方言誌』⁽⁵⁾の民具篇に県内全域からの様々な民具の方言名が収集されており、沼津市内から収集された名称を、

それぞれの該当する項目に加えておいた。

沼津市域を中心にした民具については、主に「沼津市歴史民俗資料館」の刊行物（「資料館だより」「展覧会図録」「研究紀要」「解説シリーズ」）で、個別の民具解説や論考を紹介している。文末にリストを示しておいたので参照していただければ幸いである。

注

- (1) 『沼津市史 資料編民俗』付録民具図集（平成14年3月 沼津市刊）
- (2) 神野善治「浮島沼周辺の生産用具」『沼津市歴史民俗資料館紀要』3、昭和54年刊
- (3) 神野善治「浮島ヶ原の湿田農耕と用具」『中部地方の民具』

- （明玄書房 昭和57年刊）
- (4) 『沼津内浦の民俗』（1976）沼津市教育委員会、『沼津静浦の民俗』（1977）沼津市教育委員会
- (5) 内田武志『静岡縣方言誌 分布調査第三輯 民具篇』（『日本常民生活資料叢書』第14巻 三一書房）1973

沼津市域の民具参考資料 主に沼津市歴史民俗資料館刊行物に筆者が執筆したもの

【特別展図録】

- 『特別展・漁村の絵馬絵図（図録）』（1976.12.1）
『特別展・はこぶー生活と運搬ー』図録（79.7.1）
『特別展・原始漁法の民俗ーモジリ・ウケの世界ー特別展図録』（1981.7.11）
『特別展・郷土の絵馬』（1982.7.1）

【資料館解説シリーズ】

- 『資料館解説シリーズ「かつお節作り」』（1977.10.30）
『資料館解説シリーズ』10「船霊様」（1980.11.15）
『資料館解説シリーズ』13「船上の用具」（1983.9.15）

【民俗資料館紀要】

- 「大瀬神社奉納漁船模型」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1（1977.3.31）
「ハコネ竹・スズ竹の民具」『沼津市歴史民俗資料館紀要』2（1978.3.31）
「浮島沼周辺の生活用具」（『沼津市歴史民俗資料館紀要』3（1979.3.31）
「伊豆の運搬習俗」『沼津市歴史民俗資料館紀要』4（1980.3.31）
「釜漁の研究（上）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』6（1982.2.25）、
「釜漁の研究（下）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』7（1983.3.30）、
「駿河湾北部のイカ釣漁」『沼津市歴史民俗資料館紀要』8（1984.3.30）、
「漁村における糸撚り技術とその用具」『沼津市博物館紀要』9（1985.3.30）

【『沼津市歴史民俗資料館 資料館だより』1976年～1986年】

- 2-4「餅つき臼と杵・ヒシモチの型」（年中行事と民具1）／5-1「網目と魚ーシラス網についてー（海の民具1）」／5-2「釣糸を撚るー紡錘の使い方ー（海の民具2）」／5-3「イキョウー生簀籠作

りの盛衰ー（海の民具3）」／5-4「クルリー麻糸のワイヤー作りー（海の民具5）」／5-5「岩のり掻き具ーカイについてー（海の民具4）」／5-6「水メガネと油ツボ（海の民具6）」／6-1「桶作りの用具」／6-2「船大工用具1」／6-3「船大工用具2」／6-4「カゴヤの道具」／6-5「石工の用具」／6-6「髪結の用具」／7-1「キンマ（木馬）」／7-2「漁民の道具箱ーオビツー」／7-3「漁民の弁当箱ーチゲとメンバー」／7-5「トンボ笠 その1」／7-6「トンボ笠 その2」／8-1「櫓の話 その1」／8-2「櫓の話 その2」／8-3「カシオケとむかし話」／8-4「碇」／8-6「サンジャクナンバ」／9-1「樟脳屋の手斧」／9-2「ササモジリとイカノス」／9-3「ロープー（魚見のメガホン）」／9-4「スミンチョと蘇民将来」／9-5「トバー漁船・漁具の雨除けー」／9-6「カッテ」／10-1「葬式の龍頭」／10-2「カジキの突ん棒漁」／10-3「ササカイ」／10-4「追込網と琉球漁民」／10-5「ズッグ竿ー釣竿なしのウナギ漁ー」／10-6「ホウコン槌ー船大工の槌音ー」／11-1「かつぎ籠とポテー」／11-2「リュウゴンさんと海蛇」／11-5「ケンチマス」／12-1「耳白禰天」／12-3「船の掃除用具ーボウズリとアカトリー」

【その他（学会誌等に筆者が執筆したもの）】

- 「伊豆の生簀籠」『民具マンスリー』12巻8号、1979.11.10、日本常民文化研究所
1980.3.31「静岡県における伝統的仕事着の様式Ⅱー漁撈の仕事着・焼津の場合ー（共著）」『生活科学研究所報告3』日本大学三島学園
1982.2.5『南中部の生業 2 漁業・諸職』明玄書房
1984.11.24「網漁具の分類と整理」『民具研究講座講演要旨』神奈川大学日本常民文化研究所
1985.5.15「駿河湾の漁網作り」「駿河湾の建切網」『日本民俗文化体系13 技術と民俗上』小学館
1985.8.15「漁網」『講座日本技術の社会史2 塩業・漁業』社会評論社